

解説

その一

山口剛

この洒落本集に收むるところ、すべて三十四部、四十一冊、すなはち、百花評林、聖遊廊、月花餘情、異案六帖、遊子方言、辰巳之園、當世氣轉草、婦美車紫野、妓者呼子鳥、深川新話、道中粹語錄、大通多名於呂志、愚人贅漢居續借金、教訓彙軌本紀、和唐珍解、令子洞房、通言總籙、古契三媚、田舎芝居、和歌始衣抄、女郎買糖味噌汁、田舎談義、娼妓絹籠、錦の裏、仕懸文庫、辰巳婦言、傾城買二道筋、讚極史、籙の花、廓宇久爲壽、箱まくら、色深猿睡夢、新湯後の月見、金郷春夕榮、これである。時で分ければ、延享一、寶曆四、明和二、安永六、天明九、寛政七、文化一、文政四、嘉永一、土地で分ければ、江戸二十八、京阪五、新潟一、金比羅一となる。總數約四百部といはれてゐる洒落本全體からいふと、あまりに少な過ぎるものゝ、さすがに、その最も聞えてゐるものを讀み、また洒落本の變遷推移のあとを辿るに足るものは、挙げられてゐるやうである。その一つ一つに就いて、短い解題を左に試みる。

百花評林

序文一丁、本文十六丁の小本、半紙四つ折の常の洒落本形より更に小形である。表紙は黄褐色、題簽は緋

唐紙、すべて唐本仕立てである。刊記を缺いてゐるが、序文の末に丁卯春正月之吉とあり、また探花亭主人とあるので、延享四年の作と推せられ、また探花亭主人の著と知られる。探花亭主人の何者であるかは未だ詳でない。

この篇は遊里の諸花の姿と意氣かたを批評したものである。美女を花にたとへる例は多い。今それに倣つて百花と題したのだと巻頭にしるしてゐる。この書の性質はこれでは明であるが、これだけではまだ盡さざるものがある。すなはち、太夫、天神、鹿戀、月、影、汐、分、引船、遣手、禿、白人、中居、藝子、坂町の妓、堀江の妓、難波新地及び高津新地の妓、こそや、



紙表〔林評花百〕

百花評林

此篇^{アゲテイロザトノ}舉平康里之諸花^ヲ以評^ス其風度^{スカタ}

意氣^{イキカタ}古人^ヲ以美女^ヲ比^{スル}蒼者多^シ故^ニ以百

花^ヲ命^ス題^ニ云

○太夫^{タメ}

松^ノ佐^ハ者^{タリ}為^ル蒼木^ノ之長^{タカサ}高砂^{オノ}尾上^ノ之若^{ミドリ}緑

百花評林

二

はすは、比丘尼・總嫁の二十類を、花に見立て、品臨したのである。たとへば、太夫を松、天神を梅、比丘尼を枯野の尾花、總嫁を暗夜の落花といふたぐひである。品臨の辭はどれも漢文で書いてある。つとめて洒脱の體を心掛けてゐる。更にその意を一首に要約した和歌を文後に添へてゐる。

遊女また若衆役者の容貌態度、或は藝風を品臨した評判記は、遊女物の「桃源集」若衆物の「野郎蟲」以來、數多く刊行されてゐる。これ等は、月旦の文詞の外に、和歌また狂詩また狂歌を件ふのが例であつた。「百花評林」とそれ等の關係は、かなり密接であるといはねばならない。書名さへも、元祿十三年刊行の「野姿記評林」と一脈の聯絡のあることが考へられる。しかし、それ等の多くは、遊女また若衆の一人一人を品臨してゐる。それと比べれば、「百花評林」が類を以て分ち、品によつて評したのは、いきゝかの新案であらう。花の見立の如きも、作者が自負してゐるやうに、また相撫の新案であらう。尤も遊女の見立に花を用ゐるのは、想としては、もとより陳套に屬する。とても「浪花色八卦」の斬新に及ぶべきものでなかつた。この書は八卦を假りて、大阪各地の遊里の風格を説いた評判の書である。「百花評林」より少しく後れて出てゐる。

思ふに、「百花評林」の新しさは、それ等よりも、むしろ漢文仕立といふ點に繋がる。おのづから江戸の遊里の書「調兩巴厄言」「調史林殘花」に呼應する。これ等は漢文の遊里志であつた。共に「百花評林」以前に刊行されてゐる。「兩巴厄言」は享保十三年、「史林殘花」は同十五年であつた。しかし、「百花評林」には和歌もあれば、和文で書いた評もあるので、必ずしもそれ等の書の體裁と一致しない。

この和文の評と聯關する場合も、或は離れて獨立してゐる場合もある。或は和文評の中で批評の批評の形をとる場合もある。評する者は探花亭主人の外に、多くの名が見える。たゞし、どれも假托の人物である。

評林の體を假り、諧謔を弄するために、都合のよい手段であつた。

作者が遊里に關するものを、漢文で書くといふことがすでに諧謔のためである。その諧謔を一段と進めるの

が、本文を古典らしく扱ふことである。「百花評林」はもとよりその工夫

を忘れない。たとへば、延享度には

存在しない鹿戀、月、影、汐の目を

掲げ、漢文の評を下してゐるのが、

その一例である。しかも、和文の評

の方で、それ等はすでに廢されて、

今では、小天神の格式がそれである

と斷つてゐる。この場合では、和文

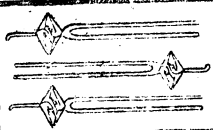
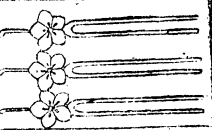
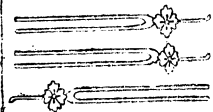
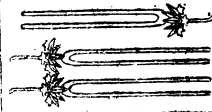
評はおのづから漢文評に對して、釋

義の形をとつてゐる。

この書を、後の「遊子方言」以來

の洒落本の型に當てはめることは出

來ない。しかし、發生期に於ける洒落本の代表作として、重きをおかれてゐる。

	
クワクワヤウ 雷鶴 主卦 るい 云々 せん	キツカウ 桔梗卦 坂町 崎の目
	
クワクワヤウ 花菱卦 主卦 るい 北條 八軒 れいふ お田山 北條	リヤウタン 龍膽卦 中町 北條 るい お田山 北條

體口「井八色花道」

聖遊廊

大坂高麗橋筋四軒町書肆堺屋市右衛門梓とある。大坂洒落本の最も古きも

奥附に、寶曆七年丑六月吉日の、一つである。本文二十丁半の小本。この書、後に改題して「雪月花」といふ。書中の三聖を雪月花に擬して、この名を題したのであらう。作者の誰であるかは未だ詳でない。或は相應の漢學者であつたかと推せられるだけである。

孔子、老子、釋迦の三聖が揚屋入をすることがすでに奇抜の趣向である。しかも、合方として、孔子に大道太夫、老子に大空太夫、釋迦に假世太夫を配するなど、巧に三聖の教義を利用してゐる。また揚屋の亭主を李白とし、幫間を白樂天、鐵拐仙人とし、その他、

聖遊廊
繒壁たる黄鳥丘隅小止とてまるところふ
しとてまるところふとてまるところふ
角々文字の廣くてもあるとてまるところふ
あふすむんを情の下にてもとてまるところふ
あにうとてまるところふとてまるところふ
郭のあにまるところふとてまるところふ
はとてまるところふとてまるところふ
るうとてまるところふとてまるところふ
もゆるり乃はまるところふとてまるところふ

陶淵明の合方女郎を菊、費長房のを鶴、周茂叔のを蓮とするなど、ある程度の支那通をふりまはし、更に東坡の合方舞戲子として李節推、韓退之の合方影子として孟東野を拉し來つた凝り方など、どうしても、漢學者流の戲作であることが考へられる。趣向はそれだけでない、釋迦が假世太夫と廓を抜け出て、心中することまでをしるし、しかも書置を梵字であらはし、道行を妹背の送り火の淨瑠璃できかせるなど、出版當時の讀者の驚きぶりが推察せられる。享和二年刊、江戸板の「戲作評判花折紙」の評言はやゝ後のものではあるが、幾分の參考にならう。

眞取「寶曆の丑水無月の五日、御當地はじめての御めみへにて、その節ははなやかでござりました、則初舞臺の節、釋尊の役をつとめられ、道行いもせ送り火といへる淨瑠璃にて、宮古路連中出語り、かりの世太夫との所作事、大入大繁

雪月花

繒壁に黄鳥丘隅小止るもさるどろふ
 角を文字の廣にてもへまゝに
 ぬすむ人を情の下にむむと白つと
 家にうゝるにあれも和國のなまめ
 郭のふいふははなをたのしむて力の
 けうとぞやなりや秋夜をせん
 るるもけさ無常のや成やうと
 もゆりり乃はされ一うとぞうと

昌つかまつりました。ひいき「頭取のいはるゝとほり。その昔ははなやかでござつた。頭取」只今にては、別しての仕打もござりませぬが、御老功故、何をさせても、儒佛老おしへかたがきつゝいもので御座ります。

洒落本の定式ものは、會話体の文章が中心になつてゐる。この書は、その体を巧にこなしてゐる。この点に於いては、「遊子方言」より、ずつと先だつてゐる。後の洒落本の會話の主の名は一々箱印でかこつてゐる。その工夫は、この書の三角印から暗示されたものだといふ。いふものは、例の「花折紙」である。頭取の言葉として、かう見えてゐる。

當世のしやればんに箱をかきまするも、この本の▲の印がござるからの思ひ付でござれば、しやればんの先達でござります。

この書に於いて、忘れてならないのは卷末にある「くるは唐韻」である。多分の訛はあるがとにかく廊中の用語を唐音で書あらはしたもので、これである。書中にはさうまで必要のないのを、殊に附載したのは、作者及びその周囲が、この種のものに特別な興味を寄せてゐたためであらう。それ等に興味を寄せるほどの者は、また悦んで支那の歴史の類を讀んでゐたやうである。「聖遊廊」の成立には、或はそれ等が與つて力ありはしなかつたか。これはひとり「聖遊廊」だけの問題でない。發生期の全部に亘つていひ得ることであらう。

孔子老子釋迦の三聖が廊に遊ぶ趣向は、續編として、子路が孔子の命を奉じて、日本の遊里見物に來たこと、揚屋吉田屋の兼好のもとで六歌仙だちが子路をもてなして、當時の大坂の穴を語ること、また素人芝居を催すことを作らせた。寶曆十三年板「列仙傳」これである。著者は先賢卜子夔である。何人の匿名である

かを知らない。序は漢文で書き、しかも、康熙十八年癸未冬十月壬午 七十二叟可亭董寧肅沐拜序 南京沈
無有謬書などとするしてゐる。作者の好みのほどが知られる。また、この書に當世「穿ちのあるのは、前編
よりも所謂洒落本の型に入つて
來たことを示してゐる。注意す
べき一つである。

唐來三和の作、天明二年板の
「通人三教色」が、「聖遊廊」を典
據としてゐることは明である。
かの三聖は、これにあつては、
孔子釋迦及び天照皇太神宮であ
る。例の「花折紙」にも「當時
のきゝもの三教色丈なども、こ
の藝はだをまなばれましたの仕
うち」と見えてゐる。いさゝか
憚るところあつて、その梗概の
記述をも避ける。

通人三教色
前座 三聖邂逅
四季繁華曰孔子名丘仇名通其先通人
父者行簡母者俠氏以其女郎二十二
歲年明之歲十一月庚子生孔子於此昌
平橋水道爲兒嬉戲常唱河東叅青樓及
長成意氣浪浪度度也ふとこりけりて
へ嘘めて鬚長の骨長きも齒ゆめあ

月 花 餘 情

序文をこめて二十丁半の小板。大坂板である。作者は序文の署名によつて、獻笑閣主人であることが知られる。その何者であるかは明でない。刊行の年月また詳でない。しかし、寶曆六年以前の作であることは、すてにい はれてゐる。その證據として、八幡大名の作、寶曆七年正月の板、「穿當珍話」の一節が擧げられてゐる。

〔知曉〕花情丈の事に付て彼是致し御無沙汰申しました、擬花情丈氣の毒で御座ります
 〔先生〕何と致したな〔知曉〕また餘程盡されました此度は松風ではないが、鹽ふみに上鹽町邊へ閑居の身分となられました。



紙 表「情 餘 花 月」

月花餘情

此書不知何人之作。初有妓邑，親次

之^ニ以^テ歡^ニ喜^ス
 即^チ持^テ函^ニ宮^ノ
 之^ノ語^ヲ止^メ終^ニ有^リ祕^ニ

戲篇祕戲即帷幄之吏也於免饅頭

ノミキタルスケノガキヲクリノミヤベニ
之ヲ多食須知之苦各有其味非ニ味

中味而贈炙人口者豈非此也

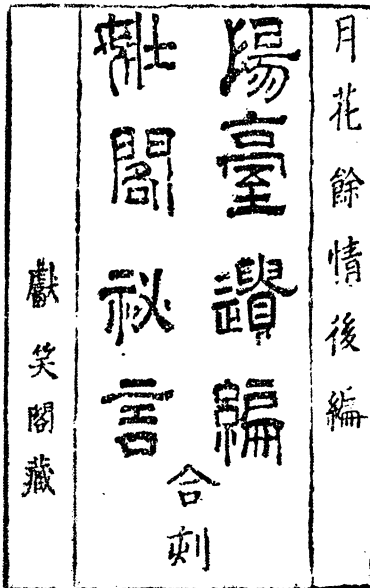
月花餘情

三

とある花情は「月花餘情」の主人公である。「月花餘情」には花情の遊蕩をしるし、「穿當珍話」はその後の窮命をしるしたのであらう。この二書は實は同一人の作であつて、後者に於いて、前著の吹聴をしたのであらう。かういふ見解のもとに、「月花餘情」は少くとも「穿當珍話」以前の刊行と推定せられる。さうすると大坂の洒落本の會話体の先蹤は「聖遊廓」でなかつた。また話の主の名を箱で圍ふ工夫も「聖遊廓」でないことになる。さうすると、作の出來不出來は別として、「月花餘情」は洒落本史に重要な位置を占めることになる。

「月花餘情」の序文は漢文で書かれてゐる。ものいひ、書きぶりの少なからず「百花評林」に似てゐることが、二書共に同一人の作でないかを疑はせる。

本文は三篇から成る。はじめに「江南妓邑記」がある。漢文で遊里島内の情景を記述してゐる。項目を擧げて、妓を説き、中居を説いてゐるが、着眼また甚だ「百花評林」に似てゐる。次に座敷の遊びぶりを、洒落本定式の會話体で書いてゐる。客花情を中心に、女郎、藝子、中居、揚屋亭主、花車などを活躍させる。「燕喜篇」と題する。この篇と前篇との關



係は、抽象と具象の關係である。努めて具象的態度をとるために、篇中の人物がうたふ流行唄に節附をさへ施してゐる。最後が床の間、「秘戯篇」と題する。尤も、これは題目だけを殘して、本文をしるさない。散佚に托して「而今亡矣惜哉惜哉」といつてゐる。諧謔の筆法である。

「月花餘情」の後編として、「陽臺遺編」がある。「神閑秘言」と合刻してゐる。「秘言」は前編の「秘戯篇」をうけるものである。獻笑閣主人の作。刊行の年月を詳にしない。

これには妓を詠じ、島内の情景を詠じた漢詩數首がある。その叙として、漢文の妓島記がある。前編の「江南妓島記」に形質を同じうしてゐる。往々説いて重複するものがある。たとへば、前編の藝子のくだりに、年紀畧限于二八前後といひ、絶不薦寢席、因又稱無色といつてゐるのを、またくりかへして、有接歌調妓者の釋に、原是稱藝子者也、自今以來、呼藝妓稱無色、多以妓之爲春秋者、而當此役、然有年及不惑務于此役者、但是自中之一二而已といつてゐる。中居のくだりは辭句全く相似てゐる。その説明ぶりが、いよいよ「百花評林」との關係を思はせられる。殊に有白人者の釋に注意すべきものがある。原是稱白人、史記遊俠傳索隱曰原是稱薄仁而可也、一言訛轉以薦寢席爲務とある。

北 州 異 素 六 帖

寶曆七丁丑歲正月吉日 書林東都淺草御藏前茅町二丁目六河亦次郎板本村木町四丁目柴田彌兵衛全と奥附に見える。江戸洒落本の最古の一つである。上下二冊、上巻は十四丁、下巻は三十二丁。形は半紙四つ折。上巻に先々道人の漢序一つ、和亭主人の和序一つ、何遊堂爰歌の跋一つをおさめてゐる。作者の名はしるさ

北列

異素六帖

上

紙表「第六素異」

れてないが、澤田東江の著であることは、彼の直話として、蜀山人が傳へてゐるものによつて明である。

東江先生が八丁堀の地藏橋に居た時分、門人の數が未だ少くないので、正月の會はじめに、岡部公修と共に來るやうにといはれて出席した。その折「吉原大全」を作つたとて、板下のまゝ見せられた。また唐詩選と百人一首の下の句を合はせて、青樓の事をするした「異素六帖」といふ小冊子を著はしたとの物語を聞いた。蜀山人の隨筆には、かうしるしてある。

東江、名は鱗、字は文龍、はじめ東郊と號し、後東江と改めた。程朱の學を林鳳谷に學び、書道を高願齋に學んだ。書名大に著はれて、その經學文才の名はつひに掩はれてしまつた。彼は美貌であつた。若い頃は放蕩三昧で、吉原に居續のみしてゐた。彼の名はあまねく娼家に知れわたつてゐた。「異素六帖」「吉原大全」の著のあるのも偶然でない。「異素六帖」は彼の二十六歳の折の作であつた。

「異素六帖」は「義楚六帖」のもぢりである。異素とは白きを染めるの義を以て、色を意味する。この書の題簽には「異素六帖」の上に、「北州」の語を冠らせてゐる。すなはち、吉原物なることを標榜してゐる。

上卷には、まづ佛者、儒者、歌學者の色道論がある。論はその頃行はれてゐた談義物の形式のさまで珍しいものでないが、論の決着として、吉原に關する題を出し、それにあてはまる唐詩選の詩句と百人一首の下の句とを引合はせることになる。上卷は、いはゞ下卷に對して惣序の位置にある。

下卷のには五十五題に對する詩歌がある。作者はおのづから分類を以てしてゐる。下卷のはじめにその上しを説いてゐる。一、初三全盛の威をいふより、以下の二十二段女郎のうへをいふ。一、二十三より十二段客の事をいふ。一、三十五より十一段雜事をいふ。一、四十六より五段又女郎をいふて秘事をあかす。一、

五十一、五十二、又客の談笑をいふ。一、五十三より五十五まで總論。すなはちこれである。諧謔をもとめて、わざと事々しい扱ひをしたのであらう。

縁のない詩歌を無理に吉原に結びつけたをかしさを、なほ一段と徹せさせるために、註釋を加へてゐる。

作者は牽強附會に最も力を盡して、趣向とした。尤も、この種の諧謔は當時に多少の類作があつて、必ずしも作者の獨創とはいはれない。否、作者はそれ等をも參照して、案を立てた形跡がある。たとへば、「親のためにつとめする女郎」の條に、「花里通商考」を引いてゐるのも明である。この書を、惣雪隠の條に引いた「漢書地理志」などと一つらにするところが、作者の工夫であつた。「花里通商考」は少し前に刊行された洒落本である。「異素、帖」に引用せられたのは、吉原國の條下である。

人物至て色白く、甚美なり、齒都て黒む、髮長し、眉は一人々々にあり、臍の下毛なし、風俗地女國に異なり、金入、ひろうど純子、毛織已下種々の美服を着す、櫛笄は金銀、或は鼈甲、象牙を以て飾レ之、酒を吞事猩々の如し、煙草を好む事、紅毛の如く、身に自然の香氣有つて、皆人鼻毛をのばす、口少し甘嘆し——

この中から、たゞ一句だけを裁斷して、「獨在異鄉異客」の註釋に資し、「異鄉異客の異は、花里通商考に云、風俗地女國に異なりといふがごとし」といつてゐることに、細かい用意がうかゞはれる。

遊 子 方 言

本文三十二丁、序文及び目錄を合はせて三十四丁の一冊。形は常の小本。

序は漢文、末に田舎老人多田爺謹書と署してゐる。本文もとよりこの人の作と思はれる。この書刊行年月

を明記したるものがない。しかし、二つの條件を理由として、明和七年の刊行であることが推定されてゐる。

一は明和八年板の「虚實馬鹿語」に、この書名が見えてゐること、も一つは「中古風俗志附録」に、

明和七寅年、辰巳之國といへる深川の女郎買の事を記したる小冊、遊子方言といへる吉原の事を記したる小冊版行になる、右二部の洒落本大にはやりたり

とあることである。

作者かと思はれる多田爺は何人であらうか。平秩東作の「葦野茗談」には、丹波屋利兵衛と見えてゐる。また他の傳では多田屋利兵衛であるといつてゐる。それならば、多田爺の多田は、その屋號から出たことになる。多田屋利兵衛とは、この書の再摺本の奥附に、板元としてゐる名である。堀江町四丁目の住であつた。

再摺本の卷末には、書林の二字を残して、その名を削つてゐる。削つたあとに、微かに須の字が讀まれる。その事實と、「葦野茗談」の、利兵衛が遊子方言を著はして、須原屋市兵衛に刊行させたといふ記事を参照することに於いて、初摺は須原屋、再摺は多田屋であつたらう、それもこの書の流行による利益問題がさうさせたのであらうなどと推測されてゐる。

「遊子方言」の名が「揚子方言」のもちりであることは言ふまでもない。方言は、吉原の廓ことばの義を示したのであらう。

發端、中の町、夜のけしき、宵の程、更けての體、しのゝめのころに分れてゐる。發端は舟に乗るところから大門口まで、中の町は茶屋の有様、夜のけしきは仲の町の光景、宵の程は座敷の體、更けての體は閨の

熱帯

小妻のよろ柄にこそすに人の男すに「あまの
 るげ。太本多太じいバ格けとる羽織。
 幅の細き袴の幸むでうに細身の足きじ」振ま
 せよこれ羽二子の紋染もちとよごれ小袖
 ぬかき小紋金堀の片袖ちうらやうにえい。ろろ
 さめと緋縮緬のもちでん。よきやくとま。幅じろの
 らく下袴。やまお額巾かきお。鼻紙拭いたりと

内、しのゝめのころは、朝がへりの體である。夜のけしきを除くの外は、すべて會話體である。江戸に於いて、洒落本の常式を備へた最初のものであらう。

例の「花折紙」では、この書を總卷軸に推してゐる。小書いしやうつけのかい山ともいつてゐる。また、當世の小冊子も、皆このしうちを見ならひましたとみへますと評してゐる。この評言は二重の意味で聞くべきである。會話體の文章であることが一つ、内容に半可通を用ゐて、ある滑稽役を演ぜさせることが一つである。半可通が、自分一人通り者めかして、自慢たらたらと、生息子を煙にまいてゐるのが、後に箔が剥けて、野暮の骨頂を現はす。これが洒落本の典型である。この書には、その型が巧みに描き出されてゐる。しかも、最初のものである。當時に於いて、大に受けたのも無理がない。「花折紙」の如きも、主として、その手腕を推稱してゐる。

第一番目、傾城買の通り者の役に、船中からの様子、土手の惡じやれ、大門にまでうぬぼれ、中の町の茶屋にての大塩屋、大てれほうの面白み、平氣な顔のおかしみ、大當りく。

辰 巳 の 園

序文及び附録ともに三十六丁の一冊。形は常の如し。

作者は夢中散人寢言先生、漢序一つ、樽閑街紫樓の署名がある。それに明和七庚寅林鐘撰之とししてある。刊行の年月を知ることが出来る。林鐘は六月の異稱である。また外に作者の自序がある。作者夢中散人の實名は未詳、彼にはなほ數部の洒落本があつたやうである。安永二年の「南閨雜話」同六年の「芝居蟲屑

春風はむのかりと逢く吹乞はくもろ
うそえりや野花も法衣夢田を雲
の風流所へ移る折うめすのみ
花露下葉仰如風の糸糸あひまき
歌集のゆふ歳を去父のお織はま橋の小
神ハミ代り宿の時よゑ八女城のまほしの
帯。泉御衣小童云折れぬ心へ
おのれ久形なむ少きなりけり
うみ出るやうの男おねと結ぶれば

方言」がそれである。

「辰巳の園」の辰巳は異である、東南である。この書は江戸の東南に當る深川の遊里を舞臺としてゐる。自序はおのづから、吉原深川の比較論となつてゐる。本文は、その七場所の中、仲町の遊びを描寫してゐる。けれど、深川遊びの洒落本の最初のものである。

趣向は「遊子方言」と似てゐる。半可通の如雷が、田舎侍をつれての深川へ行く途中、舟の中で、頗りに流行を説き、また通をふりまはす。それが一度妓樓に上る段になつて、化の皮を現はす。また別に通客の遊びを寫して、深川の騒ぎを見せると共に、如雷の遊びと對比させてゐる。そこに滑稽の味を出さうとしてゐる。附録として、通言また挟み言葉の説明がある。本文用語の注釋といふ形式をとつてゐる。當時の洒落本はともすると遊里案内の書の格であつた。従つて、この種のものが必要としたのであらう。

この書の再板本は、紫樓の序文に於いて、年號を削つて、林鐘撰之のみを残してゐる外に、自序また本文の中にも多少の異同がある。この集に收めたものは、勿論初板の本を底本としたのであるが、参考のために、再板本との比較を擧げる。主要のものにとゞめる。

自序。八七頁十二行、禿有は小女子せうじといふ。再、小女郎こやうらうあり。本文。八九頁上段三行、日暮里にっぽり。再、日暮里ひぐらし。八九頁上段十四行、花の會に屋鋪に鞠。再。花の會にそして屋鋪に鞠。八九頁中段十七行、楊枝屋の娘、美、再。娘の美うつくし。九〇頁下段九行、かみさん女に、再。かみさん女中に。九〇頁下段十四行、つやめり買に。つやめりやす買に。九二頁下段十六行、京扇子をばちさせ。再、京扇子をばちつかせ。九三頁中段十行、あぶらやへ。再。扇屋へ。九三頁下段七行、風流ふうりゅうの馬士ぶしをお聞なされましたか。再。風流ふうりゅうの馬士ぶしをお

聞なさりやしたか。九四頁下段四行、馬喰丁の上總や五兵衛。再。馬喰丁の紙屋五兵衛。九五頁上段六行、富八でも豊後なら。再。富八でも豊後ぶしなら。九五頁上段十二行、富田屋と云のが、そだ。再。富田屋と云のが、そだ、今はわきへこしやした。九五頁上段十五行、芳丁に西川重三郎と云人形遣ひ、ぞうしがへやと云て有。再。芳町に人形づかひ西川重三郎がぞふしがやと云て有。九五頁上段十八行、萬屋新萬屋。竹伊勢と云は伊勢太夫が内じや、鹿の子餅は又太郎が見世、向の角の八百屋は大谷廣右衛門いつくらしも此類がある。再。萬屋新萬屋は市松竹伊勢屋といふのは隠居した伊勢太夫が内じや、鹿の子餅は又太郎晋八と兄弟が見世じや、角の八百屋は大谷廣右衛門、今では人形と錦繪を賣りやす、いつくらしもこんな類がある。九五頁下段八行、**「お長」** 何サかみさんの部屋にでも寝て居なさりやせ **「志厚」** それも久しいもんだ **「お長」** なんでも待つて居ね お長は出て行知寄は廊下でぶら／＼して居 **「お長」** なせそこに居なさりやす **「如雷」** 酒に酔たから。再板は「」の間を缺く。九九頁上段四行、**「船頭」** 船はとふに來て居やす **「客」** サア／＼そんなら此間に **「おてう中」** 此間に、「利中繁太夫梅太夫」ハイよう御召なさりませ。再板は「」の間を缺く。

當世氣轉草

扉に、金金先生著、當世氣轉草、附瀬川菊之露とある。題簽及び卷頭には、當世氣とり草とある。奥附に、安永二癸巳年四月 書肆安原平助版とある。

附錄の瀬川菊之露、また山陰萬八の序、雲突の跋と共に、六十七丁の一冊物、たゞし、大字で書いてあるだけに、分量からいへば、普通の洒落本よりも短いほどである。大さ常の如し。



紙「世氣のり」

當世氣とり草

ウキや太平のわてたま

御代乃たえーにハギハ張やに

ハ系かみ屋や。沖おき中なかつのつ

たーハ曲まが終はつ末はつつて旅はろ

ヒ。花はなあゝの系かみ込こハ

擔か夫うささあつて速はやー。出でる

本文「草御系世當」

作者金金先生の傳未詳、金金の名は、立派な通人を意味する當時の通言から出てゐるやうである。氣とりの義は、また通とも、洒落とも解せられる。この書は、通人の眼で見た世相の穿ちの戯文である。初期の洒落本には、往々この種のものがある。

この書の本文はおのづから二部に分れてゐる。はじめのは遊里に關し、後のは劇場に關する。この二惡場所は、江戸の文化生活の中心地、洒落の本源地である。當世の氣とりをいふ以上、どうしても、これを對象としなければならなかつた。遊里に關しては、吉原を主として、客と遊女の穴を説くと共に、その頃盛を極めた岡場所を網羅しようとする。品川、深川、新宿、氷川、神明、根津、千住、板橋、三間堂、大根昌、鐘撞堂、赤城、音羽、いろは、愛敬、猫茶屋、馬道、入船町、三角屋敷、佛店、挑灯店、車坂、朝鮮、鳥越、六間堀、あたけ、菊坂、綱打場、赤坂田町、三田新地、猪の堀、どぶ店、万福寺、藪下、市兵衛、鯨が橋、神田田町、大橋橋詰などを數へ、また衆道の惡場所、堺町、吹屋町、霞町、湯嶋、平川、代地赤城、花房町などをも數へてゐる。劇場は、江戸三座の賑ひを説き、また役者一々の評判に及ぼしてゐる。

附録の「瀬川菊の露」は、この書刊行の一月前に死歿した二代目瀬川菊之丞の追善録である。

この菊之丞は初代菊之丞の養子であつた。或は實子であつたが、憚るところあつて、養子の體裁をとつたともいはれてゐる。武州王子に育つたので、世に王子路考といはれた。若女方として、一代の人氣を一身に集めた。彼の美貌は、はやく風來山人をして、「根南志具佐」に、閻魔王の戀わづらひを書かせるほどであつた。藝風また評判がよかつたが、三十三歳で病歿した。江戸の人々の哀悼もさることであるが、葬式の華やかさが、耳目を驚した。こゝには、その人氣者の死前の事實に、わづかに、趣向を構へて、一篇の戯文とし

たのである。

婦 美 車 紫 廊がのこ

浮世偏歴齊道郎苦先生の作、安永三年の出版。漢文の序一篇共に三十丁の一冊物。形常の如し。

道郎苦先生の實名は詳でない。尤も、天明の再板本のうちには、作者蓬萊山人歸橋と署名したものもあるといふ。それならば、歸橋の匿名である筈である。尤も管見の及ぶところは、再板本にも道郎苦先生の署名のあるものもある。花折紙には歸橋の作としてゐる。

その再板本の中には、「辰巳の園後編」と角書をおいたものもある。角書の意味は、田舎侍が遊所の傳授をうける筋を、「辰巳の園」から學んだためであらう。しかし、これは、深川物でなくして、品川の遊びを書いたものである。

書の大體は、最も多く「遊子方言」に似てゐる。遊女の發端、生姜市の出會、九蓮品定、高輪茶屋の段、品川宵の景色、夜中の口舌、しのゝめのてれといった目録の立方も、ほど同じやうである。「辰巳の園」の志厚は、これの和清に當り、如雷は「遊子方言」の通り者と共に、これの歌橋及び野呂衛門にも當り、龜橋は、「遊子方言」のむすこに當る。人物の出入ほど似てゐる。或は道郎苦先生は、「辰巳の園」、「遊子方言」の趣向を合はせて、その世界を品川に轉じたのでなからうか。尤も、品川の地方色を出すために、相應に努力してゐるやうである。僧侶客を配したなども、一つの工夫であつたらう。

この書の價值は、品川の描寫にもあるが、實は、附録やうの九蓮品定にあらう。少くとも、今日では、そ



新文「圖書集成」

說解

れから受ける風俗史料の價值を大く見つもられねばなるまい。九蓮品定には、當時流行の岡場所約七十ヶ所を、上中下の三品に分ち、それを更に上中下の三生に分ち、九階級に配列し、また平家、白拍子の二類に區別し、一々に就いて、揚代、その他風俗上の特相をしるしてゐる。この平家白拍子の分類のためには、遊女の起原の説明が必要であつた。「遊女の發端」の目を立てた理由である。

作者は、この九蓮品定を、全體の筋の中にとり込むために、田舎侍が夢想に授つたことにし、それを芝明神の社頭で、知合の町人に披露することにした。これなどは、芝居の舞臺の上などでは、くりかへされた趣向であらうが、なほ「花折紙」では、相應の喝采を受けてゐる。

頭取「紫鹿子丈、最初に白拍子龜菊となつて、平家没落のものがたりを致され、白拍手と遊女のわかちを仕分けらるゝところ、大てい、それよりつぎに、江戸中の惡所場をかたられます迄、大骨折のしうちよし」。

當時の岡場所の勃興は、その一つ一つを世界とする以外に、これを總括して評判する洒落本類が頻出した。



遊女風角圖「風俗圖」

中にも、この九蓮品定に参照すべきものは、安永五年の「契國策」、また九年の「客者評判記」であらう。

妓^{げい}者^{しゃ}呼^{よぶ}子^こ鳥^{どり}

田螺金魚の作、安永六年の刊行、序と共に三十四丁の一冊物、形は常の通り。挿繪二丁、湖龍齋の筆である。天明七年に再板の折には、「妓者虎之巻」と改題した。

外題で知られるやうに、藝者を題材としたものである。作者の自序はなほ一段とその態度を明にしてゐる。橋町の藝者お豊とお富の傳を述べて、藝者の所譯、戀路の手段、また貞女の操、それにかままる女の嫉妬を、だうらく肌に書きつゞけるといつてゐる。

岡場所が勃興する頃に、町藝者もまた一勢力をなしてゐた。これを題材とする洒落本もあつた。「長命四季物語」「白拍子」の誰が袖日記「咲分論」などがある。しかし、傑出せるのは、この作であつた。

お豊お富は實在の人であつた。蜀山人の「奴風」に、かういふ記事がある。いさゝかの参考にはならう。
女藝者の事を、昔はおどり子といふ。明和安永の頃より藝者とよび、者^{シヤ}などとしやれたり。辨天おとよ、

新富などいひし、橋町に名高し。妓者呼子鳥といふ小本田にし金魚作後此二人の事を記せりに、橋町大坂屋平六といへる藥種屋の邊に、藝者多し、俳諧の點者祇徳、其邊に住しゆゑに、祇王祇女がほとりに、祇一祇徳などいひし白拍子の名にたゞへて祇徳とはつきたり、辨天おとよ追善の句に

蛇は穴辨天おとよ土の下 祇徳

といひしをかし。

妓者虎巻

○第一候風俗

西國元柳橋のへは。新に橋がたてられ。
川物屋とぞせむありき。あはれ入る客は。
森田町とて。雑沓中なるを。わづらひ。
大くねきめき。上より。中より。下より。
小舟乃片。あそび。あそび。あそび。あそび。
まのあり。まのあり。まのあり。まのあり。

そのお豊が戀敵お富を呪明する。お富はまた戀人のために、金を工面するとして、手管で嫌ひな男をあやなす。と知らぬ戀人は、一時の怒にお富を殺す。さて、事の始終をわかつたので、腹かき切る。お豊は二世まで誓つた戀仲を、寐取るばかりか、心中とは、皆お富めがなす仕業と、悶え惱みて病に臥す。その執念陰火となつて、お富の墓に落ちて、お富の靈を苦しめる。「妓者呼子鳥」の筋立はこれである。

かういふ事實は幾分かあつたらう。たゞ潤飾の程度は知るよしもない。しかし、著しいのは、從來の洒落本と性質を異にすることである。成程、この篇も、他の洒落本の如く、藝者間の穴を穿ち、また當時持て難された眞崎の狐などをもとり入れてはゐるが、作者の主眼とするところは、いふところの人情にある。はるかに、後の人情本に應ずるものとして、看られてゐるのも理である。

この人情は、金魚の作を貫く精神であつた。この書刊行翌年の板「傾城買虎之卷」と比較すれば、その特質はなほ明になる。題材は、當時やかましく言ひふらされた鳥山檢校の瀬川身請事件である。身請された瀬川には戀人があつた。殊にその胤をさへ宿してゐる。戀しさは惡漢に欺かれるとも知らず、戀人のもとに走るとて、誘はれて家出する。途中、脅迫されて、従はず、つひに殺される。その靈が病める戀人の枕邊に出現し、赤子を残して去る。巷説に基き、人情を主とし、また怪談に結ぶあたり、手法全く似てゐる。「妓者呼子鳥」は再板の折に、改題して「妓者虎之卷」といつたが、題號の選みは、おそらく、この「傾城買虎之卷」と對するためであらう。「虎之卷」の流行が前著にまで及ぼした影響であり、肆肆のさかしらであらうが、内容からいへば、妓者、傾城のちがひこそあれ、扱ひは當然一對として見べき性質であつた。

田螺金魚に就いては、神田三河町邊の町醫の子とのみ傳へられてゐる。詳細を聞かない。

深川新話

山手馬鹿人の作、安永八年刊行。奥附に、安永八年 江戸四日市上總屋利兵衛板とある。朱樂館主人の序及び千里亭白駒の序がある。外にさし繪一丁、本文三十丁半の一冊物、形常の如し。

題號は、その頃の流行書家、深川親和の名もちりである。洒落本の題號には、この種のものが少くない。たとへば上野山下のけこるに取材した洒落本「山下珍作」が、俳優山下金作の名をもちつてゐる類である。親和は三井氏、通稱彌兵衛、號は龍湖、萬玉亭、深川に住ひしてゐたので深川和和といはれてゐた。書を細井廣澤に學んだ。相應の書き手であつたが、殊に宣傳上手が、彼をして名物男にさせたのである。その名は、しばしば洒落本の上に散見してゐる。「辰巳の園」の中の會話の中に、「孫兵衛とは」「國で知つてゐる親和の事さ、三ツ井孫兵衛と云つては、手跡はよし、金は澤山あり」とあるは、彼の噂である。

山手馬鹿人は蜀山人の別號である。狂歌狂詩の雄であつた彼は、また數部の洒落本を書いてゐる。とりどりに持て囃されたが、これもまた傑作の一つであつた。世界は裏櫓である。裏櫓は深川永代寺門前山本町西方河岸、「紫鹿子」に中品上生、晝夜切七匁五分といふもの、これである。作者は、この世界に東里といふ男と、息子客とを拉れて來た。東里は通り者をきかせた者であらう。その通り者は半可通を振りまはし、息子に遊びの傳授を誇りにしたものと、却つてふりつけられ、うぶな息子は太持てに持てるといふのが、筋の運びである。筋の上から見ると、「遊子方言」以來の陳套に屬する。しかも、なほ「新話」といふのは何であらうか。

深川新詔

朝あさ凡うの松まつはは望もち乃のああぞぞにに浪なみの音おとささ

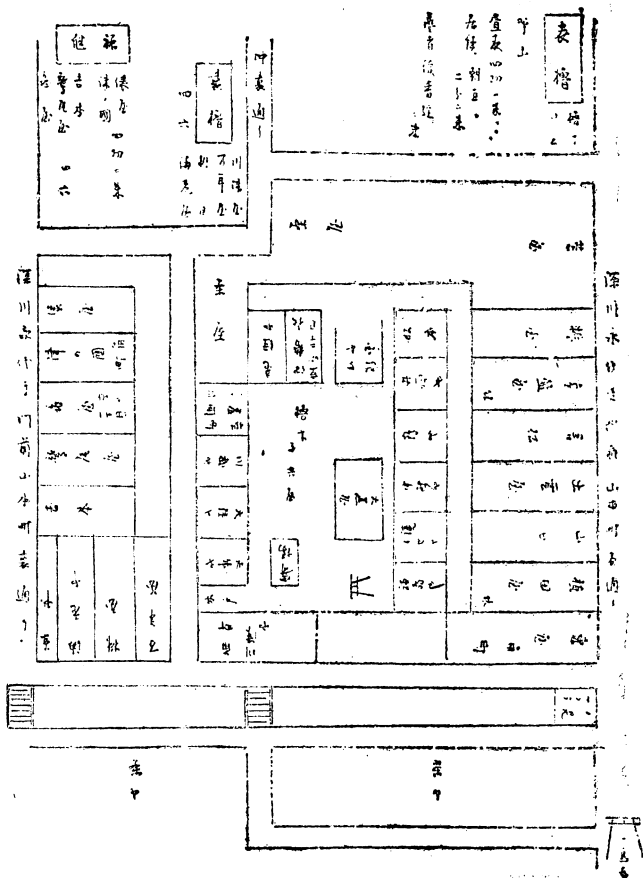
鈴すず風かぜはは人ひと多おほきき小こみみふふくく
東里 亦また別わかき

ふふいいささぬぬのの祕ひつつくく喧けん祕ひくくぞぞ
再改 十二じふに廿に八はち

りりくくももくく初はつるるふふアアここぞぞ見みんん
未 ききぞぞくくくくのの

所しよががいいろろうう身み子こ 文アイアイそそれれででももアアオオオオオオ

愛あいぞぞ初はつててめめららじじヤヤ 安ききののふふるるんんぞぞもも



「か」の「九」所載表儀義圖

沖釣は江戸の民衆の享樂の一つであつた。その歸りをすぐに裏櫓へと運ぶ、羽織も着ずに、合羽姿で乗り込み、舟の獲物を女郎達に見せるなどは、まだ洒落本にない趣向であつたらう。それを「羽衣」の語ひで書き出すなども、また新しい起筆であつたらう。客の二人をシテマキとするのも、新しい手段であつたらう。

船頭仲居の仲を書いたのも、「賤しい勘はしむすけれども、ついぞ初會から手前呼りをされた事アござんせん」とやり込める遊女の深川意氣を書いたのも、作者の新しいと信ずるところであつたらう。書中、そここゝに散見する軽い洒落は、さすがに蜀山人その人ならではと思はれ、卷末の道行ぶりに、深川遊所のよみ込み、また作者の得意とするところであつたらう。

輕井 道 中 粹 語 錄

一名を「變通輕井茶話」といふ。本によつて、題簽が二様になつてゐる。尤も、どれも、序文には「變通輕井茶話」、本文のはじめには「輕井道中粹語錄」となつてゐる。

山手馬鹿人の作、安永年間の刊行。外に作者の自序一章、春章のさし繪一丁がある。本文三十一丁、一冊物。輕井茶話は、信州の輕井澤である。輕井茶話の當字は軽い茶ばなしを利かせ、變通は江戸の通と違つた田舎通を利かせ、粹語錄は雙六を利かせると共に、粹な語錄、異様な田舎言葉物を利かせたのであらう。作者の序文の一節にいふ、

夫レ輕井澤の地たる川柳傳にあらはれたる一方の色里也。今雪國の肌を採り、飯櫃の底をたゞき、大通鑿じて變通にいたる、淺黄の裏の裏のうら、紺の布子に白あがり五所紋あり／＼と、かきしるしたる此

輕井 道中粹語録

船ゆく様をけほしや〜東へつる人ぞ
 馬道をもひきまつて豊〜そめくおれ
 寄金へ寄あ〜東へゆき通つて旦元ハ
 何れ〜もあ〜輕井 旅の終りゆく
 来たにけり 五 旦那何屋へぞアヤハ
一人よき事 城々ともんと思ふ所の事ありとていふ事とていふ事
 尻た〜とりと見ふハ合ぬとていふ事とていふ事

一卷

作者が、かういふ變通の書を成したのは、洒落本中のある要素を特にとり出して、擴充させたためであつた。ある要素とは、滑稽味である。それがために、淺黄裏の田舎侍や田舎客が、なかなか大事な道外役をつとめてゐる。たとへば、「辰巳の園」の新五左衛門などのたぐひである。彼と、通里者と自讃する如雷の會話の中にかういふ一節がある。

如「新五左、かならずつきな事をいふまいぞ」新「何サ、おれもいなかじやアお女郎買だ、今度も輕井澤であそんだら、峠迄おくつてなむし、おかへりにやア、かならずよらつしやりませと、くれぐれいふて大もてどあつた」如「なんの事だ、人が聞、そんな事は御めんだ」

作者はこの輕井澤を舞臺とし、新五左衛門の合方であつた遊女を、江戸の客の合方とさせ、また新五左衛門以上の土地ツ子を、變通の代表者として活躍させたのである。

書は二部に分れてゐる。作者は第一部に於いて、江戸客に輕井澤の遊女を配させて、風俗も、言葉もまるで違ふをかしさを寫し出してゐる。描寫の手段として、そこに江戸生の、江戸辯の女中一人を介在させてゐる。細かい用意である。「花折紙」は、それに對して、「おさのといへる女ばかり、江戸詞のしうち、どうもいへませぬ」の評を下してゐる。

第二部を、隣座敷として、土地ツ子と遊女の遊びとする。例の風俗の違ひ、言葉の違ひはあれ、手練手管の魂膽は、輕井澤も江戸も違ひはない。作者は、異風によつて、滑稽をうつしはするが、異風の底の實情を棄てなかつた。「花折紙」はまたその点を推稱してゐる。

「眞の道外方の愚は直にして、ちやり敵の愚はいつわれる所なり、いにしへの松嶋茂平次、あらし音八、みな直愚なり、よつて藝とうもきれいな、道中粹語録文この器なり、

「大切彌五左衛門の役にて、傾城田ごとと怪氣いさかひ、口舌のあん梅、またきつついもの、

この作者の洒落本は、他の作者より滑稽味に於いて勝つてゐる。「花折紙」が、この書と共に道外方に加へてゐる「世話新語茶」などもその例である。

その滑稽は、江戸の通の標準を確守することに於いて成立する。作者が世界を輕井澤にうつしたのも、實は他山の石として、ますます江戸の玉の光を増させる手段であつたらう。表面きつて、江戸の通を禮讃する洒落本よりも、趣向として、一段も二段も工夫を重ねた譯であらう。板元上總屋利兵衛の藏書目録の中には、これはぐつとひねつて口合輕井澤の地色客色のこんたんをするす

と見えてゐる。

作者は、この作から田舎の滑稽味のみを重要視されることを豫期しなかつたらう。たゞ江戸の洒落本として、ひねつた趣向としてのみ迎へられる考のみがあつたらう。

こゝの趣向が、一九の「東海道道中膝栗毛」の三嶋の條に模倣せられてゐることは、最もよく知られてゐる。この作と、「深川新話」の形は、全く似てゐる。諷ひてはじまつて、淨瑠璃風に結ぶところ、隣座敷を利用するところなど、殆ど同じ型である。やゝ注意すべきであらう。

大 通
多 名
於 路
志

むだらく

閑言樂山人の作、刊行年月の明記がないが、内容から、安永年中のものと推定される。閑言樂山人の實名は詳でない、或は雲樂であらうか、「花折紙」にはその名をしるしてゐる。

作者の自序、自跋おのおの一章、本文は十八丁の一冊物。中に、半丁の挿繪がある。

はじめの三丁半は、節附を添へた謡曲の体。長羽織の通人をシテとし、惣髪なでつけ唐衣裝の唐人をワキとする。シテは遍く娼家巡りをして、なほもの足らず、唐へ渡り、通人とも出會つて、よき趣向を得ようと思つてゐる。ワキの唐人がそれに邂逅して、渡唐をとどめる、洒落も穴も居ながらわかるが大通人と教へる。

その後は常の會話体となる。「まちうたひ後シテと云所はすぐにおはなしにしやしやう」とシテがいひ出し、「左やうく是からはやつぱり例の通りサ」とワキがうけて、ワキは、唐人の傀儡傳（おでこ）が日本の洒落を試みようとして、長崎へ來て、その娼家でおごりかけ、窮迫して歸國もならぬ折、その漁翁と詩歌を問答したこと、漁翁は實は住吉の末社であつたこと、今は唐には傀儡傳ほどの通人も居ないことなどを語る。

この一節は謡曲「白樂天」の筋を假りてゐる。白樂天が日本の智慧を計らんと來て、漁翁に身を寓した住吉明神に逢ひ、その歌に驚かされて、歸るといふのがその筋である。

さて、思ひとどまつた通人は、更に唐人から大通の傳授をうけることになる。この傳授は、洒落本に於いて、常にくりかへされる趣向である。洒落本には、遊里の教訓書と見られる性質がある。それがこれ等を必要とするのであらう。あの金魚の「傾城買虎の巻」の巻末には、特に、「やばに示す傳授事」といふ一章が設けられてゐた。また同じ人の「十八大通百手枕」は一名を「傾城買指南所」といふだけに、その傳授が中心となつてゐる。参照すべきである。

諸曲まがひも、「白樂天」の翻案も、要は、この傳授にまで誘導する手段に過ぎない。全體の半ばは、それに費されてゐる。合はせ得るものは、原據と對することによつて、知られる滑稽である。作者は一面それを尊重する。故に、「白樂天」の中に引用せる。

青苔衣（あおがき）とおびて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐるを、原形に還し、更に狂詩に轉じて、

錢代脫衣（せんたいだつぎ）否拘（ひがう）賃、半分寐（はんぶんみ）願（のぞ）美艷（みえん）。

とする必要があつた。また、住吉明神の詠としての和歌、

苔衣着たる巖はさもなく衣着ぬ山の帶をするかな
を狂歌に轉じて、

苔衣（あもぎ）黄なる博多の帶をしてきぬ／＼に野夫下鄙（のふげふ）をする哉
としたものを、わざと記載せねばならなかつた。

かうして、作者は唐人の言葉をかき、眞の通人は、心意氣にあつて、風俗にあらず、形態にあらずとをいふ。自然と、金魚の洒落本に見える傳授物の否定といふことにもなる。もとより、作者の意は、金魚に對するものでなくして、いふところの通人に對する。この皮肉、罵倒が、「大通たなおろし」と題する理由であつた。

愚人（おろこ）贅漢（ぜいがん）居（い）續借金

蓬萊山人歸橋の作、天明三年の刊行。歸橋の自序、志水裡町齋の跋、また歌麿のさし繪がある。本文二十八丁半の一冊物。形常の如し。

元祿の頃、雁金文七、庵の平兵衛、布袋市右衛門、極印千右衛門、神鳴庄九郎の破戸者の五人組が大阪市中を荒してゐた事件は、早くから淨瑠璃、歌舞伎の世界に持ち込まれてゐた。中にも、淨瑠璃の「男作五厘金」歌舞伎の「名月五人男」などが聞えてゐる。愚人贅漢居續借金の題號が、五人男五厘金のもぢりであることはいふまでもない。

歸橋の作は、題號のもぢりでなく、内容また五人男物に觸れてゐる。客と遊女の達引が主題である。舞臺は深川であつた。

まづ五人の客が、富岡八幡相撲場前で、遊所行の相談をする。出雲の原作なら、宇治川芝居前といふところである。そこで勢揃して、仲町の松江屋へおしかける。大一座の騒ぎがある、その後が、客對遊女の達引の三場である。

客の燕十は、自分の腕に合方おことの名をほつてくれと頼む、おことが承知する。それをきつかけに、燕十はおことの腕にある他し男の名を消させる。これが達引の一。

客樂の合方おつうは、初會の雲樂を、うらの客であると、座敷で文句をつけた。それは、年も若く、金もありさうなと見込んだための狂言であつた、雲樂は、その裏をかい、自分たちは借金だらけの貧窮者だ、それでも呼ぶ氣かときめつけ、おつうが謝罪する尾に附いて、これから、自分が度々來てゐるやうに噂してくれ、そして名を賣らしてくれと頼み込む。これが達引の二。

愚人養液居養集金

後、毎、實のぬき、おけいするといふ
なるもの、養液、ぬき、おけいする、おけい、
我、養液、ぬき、おけい、する、おけい、
世の中、も、養液、ぬき、おけい、する、おけい、
付合、も、も、成、い、おけい、する、おけい、
養液、ぬき、おけい、する、おけい、する、おけい、

歸橋の合方おたよは、他し男の手紙を見せつけて、歸橋に肝癪を起させ、そして金にしようとする。その狂言を見てとられたので、愛想づかしをいふ。歸橋はその手の逆を押へて、自分等の貧乏五人組は、女郎が客を囁してとつた金の敵をとりに来るのだ、といひ込める。これが達引の三。

歸橋はおたよをやり込めたと思つたのは夢。吉原大ひしやきさかたの座敷で見た夢だといふことで、一篇を結んである。この五人男物にいつも附きものである夢の場の趣向を、こゝにも用ゐたのであつた。

作者歸橋の案は、五雁金などに托したと共に、五人を當時知名の狂歌師、戯作者に托することにあつた。勿論、その中には彼みづからをも數へてゐる。彼及び四方赤良、清水燕十、朱樂菅江、朝倉雲樂齋これである。なほ、書中に見える遊女も、帮問も、すべて實在の者もあり、吉原のきさかた亦實在の者であつた。ただし、書かれた事件を、どの程度に信憑すべきかは、今日からは明でない。

その頃の戯作の中には、作者自身が顔を出すのが、随分と多かつた。作者と讀者の間を繋ぐ愛嬌として迎へられてゐた。この書の存在も、さまで驚くを要さない。たゞ、度が少し過ぎる。それも、各々を愚人とし、貧乏者とする事に於いて、まだ愛嬌を失はなかつた。また燕十が志水裡町齋の名で書いた跋文の中に、しきりに、出放題なる戯言とか、叩そてかためたとかいひながら、なほ筆を染の井の間に採るなどと、實在の吉原の遊女をひき合ひに出してゐるなども、眞偽を曖昧にして、なほ愛嬌にとゞめさせる工夫であつたらう。さすがに、赤良、菅江に對しては、屏風の中を遠慮し、殊に、赤良を、いろいろの點で立てゝはゐるが、なほ借金五人組に數へてゐるのは、どうであらうか。しかし、これほどの戯は、或は素破拔きは、當時の戯作者、狂歌師にあつては、問題でなかつた。赤良の狂歌集などの中には、もつと自分をさらけ出したはし書

を読むことが出来る。その頃の世相がさうさせてゐたのである。

なほ、この作は、歸橋の作、天明元年板の「通仁枕言葉」及び梅月堂堀人の作、天明八年の「青樓五雁金」と参照するのが便利である。「枕言葉」は、この作の前篇とも見るべき筋を有つてゐるからであり、「五雁金」は、この作と據るところを同じくしながら、人情本に近い趣向の相異があるからである。

狂訓彙軌本紀

島田金谷の作、天明四年の刊行。

四方山人の序、出鳳臺譚瑛の序、四方赤良の題歌、平秩東作の跋、及び作者の自跋がある。本文二十丁半の一冊物。形常の如し。

彙軌本紀は史記本紀のもぢりである。彙軌は意氣である。意氣は通といふに近い。この書は通を論じ、また通の興亡を叙するの体をなした一篇の戯文である。

まづ江戸の繁華の禮讃に端を發し、劇場の賑ひを叙し、市川團十郎の藝を稱揚する。次に、浪華の客との問答体を以て、江戸の流行を説き、客として、恐るべきは東都の盛なるかな、他邦の及ぶ所に非ずと歎ぜさせる。また客に青樓の曲の辯を請はれて、自傳の体を以て、通人の成長を語る。幼少父母に甘かざることより、十五歳深川に遊び、お先につかはるゝこと三年、漸く吉原の遊びに轉じて、深川の夷狄なるを知り得たといふのである。最後に、年少輩の深く色に溺るゝを戒め、また江戸節の雅音を重んずべきことをつけ加へてゐる。狂訓の二字を題號に冠する理由である。自跋は、更にその旨を明に示して、

今予が著す彙軌本紀は、全く鉦を進むるに非ず、かれを見、これを聞て以て、其しりのつまらざる事を諭し、此書を世界の息子たちに見せ、居候の難を免ん事を欲す

といつてゐる。しかし、畢竟諸諺のための托辭である。作者の意は、却つて然りといへどもに一轉したる跋文の最後にある。

然りといへども、一槩に古風を

したわば、沈香はたかずして、

屁を嗅のどんちやんあるべし。

ゆだんすべからず。

江戸の洒落本は本來のものとして、

江戸の通を説いてゐる。その中でも、

この書ほど正面から説き來り説き去

るものはない。序跋の中に、或は江

戸の本枝といひ、或は江都の中央、

ぎやつといふて生しよりなどといつて、作者を紹介するのも無理はなかつた。

島田金谷の何人であるかは詳でない。また著書も多くないやうである。管見の及ぶところ、「彙軌本紀」以

四方山人序
版唐秋人序

開門所
不不不

新發幸大寺不實錄

鳴田金谷著
鳴田振袖校

枋面房梓

原「錄實不寺大幸殿新」

外、天明七年板の「新發幸大寺不實錄」だけである。これもまた一篇の戯文である。前者は、口唐出鳳臺校訂とあるが、これは、嶋田振袖校となつてゐる。この兩人が同一人であることは、前者の出鳳臺署名の序と、後著の嶋田振袖署名の跋に捺した印章が同じものであることから考へられる。その序跋に於いて、共に、金谷の友人といつてゐるが、おそらく架空の人物であらう。この推測は、更に後著に跋を書いて金谷友人と名乗り、金谷と兄弟分といつてゐる腹唐秋人も、或は、金谷と同一人でないかの疑を起させる。もしさうだとすると、金谷は、中井敬義、江戸本町住の書家、狂詩集「本町文粹」の著者でなければならぬ。

「幸大寺實錄」の中に狂詩一章がある。今人結交須攤淫、攤淫不須交不深、縱令歡化錢取溜、終是故爲滿借金、

作風を參照する一資料とならう。秋人また狂歌を善くした。大屋裏住に學んでゐたとのことである。「幸大寺不實錄」また裏住の跋を載せてゐる。これもまた考ふべきである。

雲笈 寫田金谷著
 青丹も一奈良も東大を何や難か
 廣徳寺北門あり此門丙午に至て大行れ
 天下の人ぞも門も衆人嘲る廣徳の
 門も其用も事も門の上々三休や
 平島もんが門も甚一繁喧鳴門
 るるくお子正月ハ軍つり眼は録す湯有

「新發幸大寺不實錄」

「幸大寺不實錄」にはまた三書の豫告を載せてゐる。腹唐秋人の「無本丁穠人口」、島田振袖の「世流行起原」及び大井散人の「靜觀房追善會」これである。三書共に豫告で終つたか、どうかを知らない。未見の書であるが、廣告の上からはこの三人も、或は同一人でないかの疑を懷かせられる。「流行起原」には註して、「此書當世行はるゝ詞の出所を尋ねくはしくしるす」といひ、「靜觀房追善會」には「下手談義の文意をおもしろくとする新作の教訓」といつてゐる。推測は、それ等と「彙軌本紀」の間に、一脈の相通をおもはせる。後の考を俟つことにする。

和唐珍解

大明李^{ミナモト}^{ミナモト}天^{テン} 你們^{ニキミ}可^コ回^ヘ太^{タイ}從^{シヨウ}者^{シヤ}領^{リョウ}旨^シ李^リ
 從^{シヨウ}者^{シヤ}面^{メン}以^イ李^リ天^{テン} 你們^{ニキミ}可^コ回^ヘ太^{タイ}從^{シヨウ}者^{シヤ}領^{リョウ}旨^シ李^リ
 明朝^{ミナモト}早^サ些^{シヤ}來^キ我^ガ在^シ這^{コノ}裏^{ウラ}等^ト候^{コト}快^{クハシ}些^{シヤ}太^{タイ}
 不可^{フカク}路^ロ上^{ジョウ}住^{ジュ}冊^{ソク} 通^{ツウ}詞^ジ和^ワ田^{テン}藤^{フドウ}内^{ナイ}多^タ勞^{ロウ}多^タ勞^{ロウ}從^{シヨウ}
 貴^キ幹^{カン}李^リ休^{シュ}要^{ヤウ}賭^ト錢^{セン}藤^{フドウ}崑^{クワン}崑^{クワン}奴^ヌ有^{ユウ}些^{シヤ}事^ジ故^コ
 太^{タイ}二^ニと^ト些^{シヤ}く^ク李^リ 你們^{ニキミ}等^ト一^{イチ}等^ト從^{シヨウ}有^{ユウ}何^{ナニ}
 貴^キ幹^{カン}李^リ休^{シュ}要^{ヤウ}賭^ト錢^{セン}藤^{フドウ}崑^{クワン}崑^{クワン}奴^ヌ有^{ユウ}些^{シヤ}事^ジ故^コ

文 本「解 唐 原 和」

唐來參和の作、天明五年の刊行。

朱樂漢江の序、四方山人の序、作者の自跋がある。本文四十二丁の一冊物。形常の如し。

世界は長崎丸山の遊廓である。丸山の殷賑、丸山の遊女の特相は、はやく「好色一代男」その他に傳へられてゐる。日本唯一の異國通商の地、おのづから他國の遊里に異ならねばならない。京の女郎に、江戸のはりをもたせ、長崎の衣裳を着せて、大坂の揚屋で遊びたいとは、古くからいはれてゐる。この書の四方山人の序の中にも見えてゐる。その衣裳も外商が齎し來るものである。丸山遊廓の特相は、畢竟この外商の交渉の上に成立してゐる。

この作は、丸山の揚屋に於ける

唐人の遊興をうつし出してゐる。作者は、唐人の詞と、通詞の詞を唐言でいはせ、傍に日本語の譯を附けてゐる。和銅珍聞をもちつた和唐珍解の題號は、それに基づいてゐる。作者は、また滑稽の趣向を立てるために、



四 鳴 蟬

書中の人物を「國姓爺合戦」のそれに托して、唐人を李顯天、通詞を和田唐内、遊女を梅枝などといつてゐる。例の「花折紙」には、

和唐珍解丈、このたび李唐天の役にてのしうち、唐音をつかふおも入れ、もつともしんじつ、禪師傳來のとう音にて、唐和纂要などのきりぬきはもちいられませぬ所が大だてものゝ仕うちでござる。

と見える。しかし、書中用ゐるところの唐音の正訛に就いては、しばらく措いて問はず、たゞ、唐人の遊興ぶりは、丸山の實情でないことは考へておく必要がある。

もとは、西鶴の作中にも見えるやうに、またこの書中にも見えるやうに、唐人も丸山の揚屋遊びが出来た。しかし、元祿二年に唐人屋敷が設けられて以來、特に唐人行と限定された遊女のみが、そこに向うくことになつてゐた。その出入はなかなか

之哉山崎余二平當恨何日遂情願相偕暢遊總往事
懷來却亦可恨既慕往時亦復可恨上云嗟是為誰山
崎余二平名馳風流身不後人豈想發狂被髮見妾之
面不認出如醉夢裏一般請快醒來則個生唯你是藤
家東姐麼唯唯唯實可悅也哉生旦互跑雨甲乙春
野雉君不見元的昆蟲猶襲飛鳳蝶上下不失偶才貌
相攜俱有情飛蟲不分花好醜菜花布金賽春花亦何
得解蝶採取蝶也示何知菜有味嗚呼俺不知趣他沒
深情何至攝魂魄不攝何失心棄擲親恩重虧煩愛姐

この趣向には何か手本があつたらうか。手本は、多分明和八年の「四鳴蟬」であらう。現に、書中、通詞藤内が、蟻鏝の身替り場の漢譯を唐音で語ることがあるが、それは、「四鳴蟬」の蟻鏝記替身踊場の一節であつた。また、李蹈天がきどすを唱ふことがあるが、それも「四鳴蟬」の移松記の一節である。蟻鏝記はいふまでもなく出雲の淨瑠璃、移松記は近松の壽門松の漢譯であつた。参和は、更に丁寧に、それに唐音を附して、珍案奇想を以て、みづから誇つたのである。

唐來参和は、加藤氏、通稱和泉屋源藏、もと高家衆の家臣であつたが、天明中町人となり、本所松井町の遊女屋和泉屋の婿となつた。洒落本の「三教色」も亦彼の名作であつた。

令子洞房

山東京傳の處女作、天明五年の刊行、奥附に、「天明五年乙巳正月 通油町 耕書堂蔦屋重三郎」とある。この書また「息子部屋」ともいふ。「令子洞房」の題も、「ムスコベヤ」と訓ませたのである。戀川好町の序、及び京傳の自序がある。さし繪四丁半、京傳の畫、たゞし、彼の畫名政演と署名してゐる。本文四十丁の一冊物。形常の如し。

この書はやゝ常の洒落本と異なつてゐる。傳授書の形式である。十二條から成る。なじみの辨、後朝の客五つの見やう、女郎五つの見やう、初會もてたる様子、床と座敷との事、わるあそびの事、思ひ切の事、女郎虚實を知る事、つとめの事、いろの事、客女郎慎用心すべき事、女郎身のうへの事、これである。これを要するに、客と遊女に對する、細かい觀察が讀まれる。また遊女に對して、深い同情を寄せてゐることも知

新條の女

或人問曰女帝笑ハ幾十金位きんゐハ幾
ぞうくさうくハあまうりんゆきくありてん
肉體にくたいのお徳とく何りのりめあまを徳とくとて
もくぞとんさんアろつんをほろ
げろとてあぐさみおーあうれを
かどきつらぬうらぐあをひの化
かろんり善日 女帝笑ハ幾十金きんろ

大本「源洞子今」

られる。戀川好町が、所謂女郎買の虎の巻と傾城の智
慧養なりといひ、海内の令子に授け、郭中の花娼に與へ
よといふも無理はない。儘に遊里教課の書に値する。
書中いふことは、多く、京傳の體驗から出てゐるであ
らう。彼は丁度二十四歳、遊所通ひの狂熱時代であつ
た。

この書は、洒落本中に、しばしば見えてゐる傳授の趣
向、または、「傾城買虎之巻」附載の通の條項の如きも
のを獨立させ、擴充させたものと見られる。しかも、
それ等に必ず伴ふ風俗上の注意を避けて、心意氣をの
み主としてゐる。そこに特徴があつた。京傳の客及び
遊女の風采また言葉づかひの觀察は、彼の別著に於い
て見るべきであつた。その翌年出版の書、「客衆肝照
子」がそれである。これは圖解をまで加へて、遊女ま
た客の風俗を説き、せりふとして、その言葉の僻まで
を擧げて、穴と穿ちに専らであつた。

京傳の才氣と觀察は、この書をして、大に行はせた。



繪し「客衆肝照子」



繪しき「厨洞子今」



繪しき「厨洞子今」



不言前主人姓名

碑 墓 傳 京

數板を重ねたやうである。中に、二冊の中本形として、「廊中奇言根古禁魔起」としたのもあるが、同じ小本で、さし繪を改めたものもある。畫には署名がない。政演でないことは明である。参照のために、その中の三圖を掲げる。

京傳は洒落本作者の霸王である。讀本、黄表紙の作にも傑出せるものが多いが、最も多く洒落本に妙作が多かつた。寛政三年、禁を犯して、洒落本を書いたために罰に觸れることがなかつたら、終生その筆を絶たなかつたであらう。京傳の生れたのは、寶曆十一年八月十五日、歿したのは、文化十三年九月七日であつた。兩國回向院に葬る。墓石には京傳の弟京山の撰文を刻してゐる。

通 言 總 籙

山東京傳の作、天明七年の刊行。

文京の序、京傳の自序、凡例、及びけいこう署名のさし繪がある。けいこうは雜告、京傳の別號である。本文三十九丁半の一冊物。大さ常の如し。

世界は吉原。殊に松葉屋を中心としてゐる。「總籙」の題名は、それに基づく。松葉屋の人物の詞は、すべて、その家獨特の流行語を寫してゐる。「通言」の題號のある譯である。作者は、凡例に於いて、その旨を明にしてゐる。凡例には、

艶治郎ハ青樓ノ通句也、予去々春江戸生艶氣桃焼ト云冊子ヲ著シテヨリ己恍惚ナル客ヲ指テ云爾、因テ以テ此書ニ假テ名トス、氣之介志庵共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也

といつてゐる。あの黄表紙の好評をうけて、それ等の人物を、この書にも用ゐて、續編らしく見せたのである。「浮氣枕」の中にも、わづかながら、吉原のうがちがあり、また松葉屋の瀬川にも觸れてゐた。この篇は、そのうがちを主とし、また瀬川を主要人物とした。かれの滑稽と、これの通と、全く混ひを異にしてゐる。

この書は二部に分れてゐる。其一には喜之助の家、そこに艶次郎、志庵、喜之助、及びもと吉原に勤めをしてゐた女房が、一座して、吉原の穴をうがつことになつてゐる。其二是松田屋、おす川の座敷、松田屋は松葉屋、おす川は瀬川である。その他の人物、一々據るところがある。現はれる順で拾へば、川波は川萩、玉夕は川夕、井川は江川、夏里は松里、茶屋の男源兵衛は權平、番頭伊平次は伊平二、禿たのもはこのものとことである。煩はしければ省略する。その他、すべて寫實を専らにし

松葉館 さしやうの もくろす んかきと この中 おちか おちか	さしやま なりの角 むすや 川や 松葉屋瀬川 當時七代めの名跡さの君乃 風俗衣冠小町もねえ 不施粉黛自然美すねねと いひ川口乃くねえ 風ささめはく太夫あやうかん うゝおとろりもねえ 名いづがせりうられはうらさ あゝびやうせんせい万あふ むもきよふさずがはの ききふ風俗しすんりんふ ゆかんぐあふさやうこねえ ねねやの方角箱は足神仙のふ
書 茶 香 禿 遠州 三全 つり さうの 作の	

城 部

てゐる。たとへば、おす川の座敷をし
るして、

本間の天井には四季の草いろく、
をのく花の手柄をみせ、はりつ
けには、朱簾を畫て雲上にちかし
といつてゐるのも、瀬川の座敷をその
まゝに見せてゐるのであつた。寄木の
船底天井、眞中は花の丸金、張付みす
に菊花の圖があつたとのことである。

おす川の隣座敷で、客と女郎の大疳
癪が書いてある。瀬川の隣座敷といへ
ば染川であつた。染川は氣強い女であ
つた。馴染客の一人に對して、扇屋に
深いのあるとて、憤るところがあつ
た。客は大の疳癪持であつたといふ。して見れば、隣座敷の採めも、京傳が勝手な趣向ではなかつた。これ
も寫實であつたと解される。

京傳の、天明八年板「傾城鱈」は、これと参照するのが便利である。その附録に、松葉屋、丁字屋、角玉



文 本 「經」

通言總論

金の魚虎と云んで水道のほとと産湯も活て。
御膳えにせれ出てお膳の糸と喰て乳母日
傘はく長重痕の細腰とに陸谷も阜と
吉宗小田の髪笄ねるに安房上総も近し
く陽水の銘と仲麻呂とみど市町の角をぬ
とあげて大門とむかふのふれたるもわりける
江戸子の根は骨あるにほる日かぎのま

にていたされます狂言、きれいごとにて、御見物がたを、嗚呼々々と思はせますあんばい、きつと
うけ取ました。それより大づめ今様のげいごとにて、あそびの魂膽のしうち、ふられた客、もてた客、
その外かし店の客のこなし迄、みさには致されますしうち、古今獨歩の名人でござりますれば、それ
ゆへ位は大上々吉、立役の巻軸にすへましてござりまする。
評言、けだし、當を得てゐよう。京傳の洒落本中でも最も傑出するものであらう。

田 舎 芝 居

万象亭の作、天明七年の板。

巻頭に、この作に對する竹杖爲輕、森羅亭万倍かけ合のほめ言葉がある。もとより作者の筆になる。爲輕も、万倍も、實は万象亭の別號であつた。また風來山人門生無名子署名の序がある。これも万象亭の筆であらう。七珍萬寶の後序がある。狐面堂柳亭の跋がある。さし繪一丁、畫家未詳、本文三十七丁の一冊物。

この書五章から成る。芝居が、つて五ばん續といふだけに、目の立て方も、序開、二立目、三立目、四立目、五立目といつてゐる。

内容は、全く江戸の遊里を描寫する洒落本と類を異にしてゐる。越後大沼郡妻有郷南鑑坂の田舎芝居のをかしさを寫してゐる。見物の異風、劇場の珍妙、上演された曾我狂言の滑稽に、配するに鄙びたる戀を以てしてゐる。會話の用語は、すべて耳慣れぬ方言である。さきに「道中粹語錄」の珍趣向があつたが、それはなほ遊里の外に出なかつた。これは、遊里を離れて、彼が有つ滑稽をなほ一段と助長させたのである。しか

田舎芝居

万葉亭 著

○序言

戦後のまはるを國とて後進多れり入る。
こゝろ一語の一々々々。甚きり來む前。
能も端の帷子思ふをりし。田舎の
時通をふくく。若者ハ大泥那妻
有。に。南鏡坂村の百姓ふせ。立派よ

も、作者に所存の旨があつて、さうさせたのであつた。作者は序跋に於いて、その態度を明に示してゐる。

「遊子方言」「辰巳の園」以來洒落本の型は固定した。遊里の穿ちに拘はつて、遊女の身の上に迷惑を及ぼすことと少くない。要は寫實が度を失するためである。これは、立役が眞劍で敵役の首を刎ね、道外が禪をはづして墨丸を振廻すが如きものである。戯作の要は、寫實でなくして、寫實らしく見せるにある。洒落本の洒落を見て洒落る洒落は洒落た所が洒落にもならねば、只可咲を專とすべきである。故に、洒落本ならぬ野夫本を著はして、通となく、野夫となく、讀む者をして笑はせ、戯作の正道に還るの途を示さうとする、これがその大意である。

かゝる意見も、反動として起らねばならぬ當時の洒落本界の情勢であつた。洒落本の必須の條件である滑稽は、全く閑却されて、穿ちにのみ専らになつた。少くとも、京傳の「通言總籙」などは、万象亭の主張の前には、最も唾棄すべきものであらねばならぬ。従つて、京傳から見れば、「田舎芝居」は赦し難き洒落本の敵であらう。馬琴の「作者部類」には、二人の間に確執の生じたことが傳へてある。

萬象亭森島氏（名は中良）は蘭學戯作共に、風來山人（平賀源内）弟子也。天明年間戯作の小冊二三種出たり。その中に田舎芝居と云洒落本（一冊にて）小本尤行はれたり。その自筆序に、今洒落本は墨丸を顯はして笑はするが如しとあり。京傳閱して欣はず、こは吾が事を云る也と思ひしかば、是より萬象亭と交はらずなりぬ（此一條は京傳みづから云る也）文に臨みておもはずも、かゝる事誰が上にもあらん、慎べき事歟

享和元年に、この書の改版が出てゐる。中本二冊となつた。奥附には浪華凌雲堂、東都千鶴堂壽梓とある。

千鶴堂は鶴屋、すなはち前板の板元である。この方には、問題の序文及び、七珍万寶の後序を省き、前板のかけ合ほめ詞を改めて、竹杖万倍一人のものとしてゐる。前板の「猿腰小林の朝日に羽をのす鶴屋が板」の鶴屋が板を、これには「鶴の丸」と改めてゐる。またこれには前板にない目録を添へてゐる。

田舎芝居

五番續

段書

一一冊目 芝居見物の大評判は古からぬ新潟の出来狂言

一二冊目 田植曾我豊年踊五番續に仕掛

一三冊目 關東八十八櫓のてんべん座本山本作兵衛が當り狂言

一四冊目 假名手本忠臣藏幕なしで奉入御覽掛

一五冊目 役者中へ進物は御醫者様の獨娘おさじ茂作が世話狂言

一六冊目 戀女房染分手網大しかけに仕掛

一七冊目 田舎芝居のせりふ帳付違ひのない時代狂言

一八冊目 大切かけ合せりふ守山内山三郎兩人相勤申掛

千秋万歳樂大叶

体裁が、大坂板らしく出来てゐる。本文は、振り假名を加へた外に、殆ど異同を見ない。わづかに二ヶ所、前板で、讀んでうけとられぬところを省いてゐる。一立目のをはりごろに、「見物はとろとろ田舎鼻ども」のところとは、ぞろぞろの誤であらうが、これは、「見物はとろとろ」を省いてゐる。三立目のをはりごろ、

「お娘子さまより花絞りの手拭」の花が、原刻では百とも讀まれるあやしい字体である。これは、省いて、ただ「絞りの手拭」とのみしてゐる。

百人一首和歌始衣抄

山東京傳の作、天明七年の刊行。

この書、くはしくは「百人一首始衣抄」といつた。「始衣抄」また「初衣抄」に作る。けれど、初衣裳の義をかけていふのである。後編を「跡著衣抄」といはうとした。豫定にをはつたやうである。

京傳老人署名の漢序、源の傳署名の和序、朱翁鷄告署名の跋がある。皆京傳自身の筆に係る。さし繪一丁。政演の署名、政演はいふまでもなく京傳の畫名である。本文三十六丁。中本形である。

市川家 元祖市川團十郎 三津立役の開山 下徳田佐倉之左衛門 才牛 幡合村城跡堀越 其男幼名海老藏 室永元甲申年正月廿九日死	市川海老藏 役者の式神 初々丸藏 宝曆庚子九月廿四日死 行年六十	市川團十郎 初々丸藏 宝曆庚子九月廿四日死 行年六十	傳金の揮 傳金の揮
居宅 市川本場	市川團十郎三拜 まんり	内方 明和壬子年正月 太極寺吉	成田屋

和 明

題號がすでに示してゐるやうに、百人一首の和歌に戲註を施したものである。尤も、全部に亘らず、十八首を選んでゐる。選擇の意は、趣向の立てよいといふ点にあつたやうである。

この種の趣向は、すでに先蹤があつた。京傳は和序に於いて、

あかれる代の先たち、在中將の歌のさまをたつたの川波のをとしはなしにつくりしも、ちはやぶる事とはなれり。今はたおなじこといはんも、もゝしきやふりにたれで、花さそふあらしの庭のあたらく註せばやの心つきて、しかしか、といふのも、みづから先蹤を追つたことを語つたのである。先蹤は、翠幹子の「風流戲註百人一首戲講釋」であらう。寶曆十三年の刊行である。

三件

市川團十郎

幼名外五郎

寛政七年正月廿七死

三件

市川團十郎

幼名松本幸四郎

初号松本幸四郎

男女川

松本幸四郎

別出

市川團十郎

役者秘史枕草子云、寛政年寅の春、狂言市村座金鳴腰曾我義一、一番目鬼主新左衛門、古松本幸四郎、此時鹿嶋大宮司、子役松本七藏初ぶさいよて、かゝり、あゝ、の不作、のり、今の海虎是へ、今、按三件初、翁松本幸保七、手、り、まゝ、非、豆、保、五、年、の、松、見、で、評判記、云、く、市村、子、役、松本七藏、猛虎の、子、出生、を、の、や、く、毛、を、う、を、く、い、て、ゆ、を、せ、す、と、い、う、は、親、父、幸、四、郎、の、虎、の、ぞ、う、て、今、童、の、け、う、ま、つ、く、は、り、に、い、く、な、か、ま、て、か、か、さ、い、お、ど、は、家、の、こ、の、虎、は、な、れ、の、虎、の、足、を、く、爪、作、す、と、い、う、て、ま、ど、に、お、人、の、ま、を、う、け、い、と、を、や、な、れ、と、い、う、ち、の、親、を、く、く、を、を、と、い、う、



武

業平隅田川のほとりに住ひして、吉原の遊女ちはやのもとに通ふ。ちはやはふりつけて従はず、替間紙與、すなはち紙屋與兵衛に頼んでも埒があかない。その内、業平は金に困うじて、豆腐屋となり、水に紅葉をちらし、龍田川の三字を染め出した暖簾をかゝげてゐた。日まじに繁昌した。一方ちはやは年明けて廓を出でて後、落魄して乞食となり、或日業平の家とも知らずに豆腐のからを貰ひに來た。業平は與へなかつた、なほ以前の態度を詰つた。ちはやは恥ぢて隅田川に入水した。業平はそのよしを一首の和歌に詠んだ。

翠幹子は、かくも、

ちはやふるかみよもきかす龍田川からくれなゐに水くゝるとは

の歌を註した京傳は、これによつてやゝ趣をかへた。龍田川を角力とした。ちはやが烏川に入水することにした。またなほ「伊達競阿國戲場」にもこぢつて、角力とりをきぬ川とし、ちはやを龍田川の縁で高尾とする旨をも附記してゐる。

しかし、京傳の創案は、これ等の馬鹿講釋を、たゞ講釋とし、落語とするだけでなかつた。和歌の抄書の形式を、そのまゝに模倣して、わざと煩瑣な故事出典を頭註にすることにあつた。それ等がみな牽強附會の極を盡してゐる。彼の輕妙な奇才は縦横にその間に動いてゐた。尤も、これによつて古註釋家のこちこちしいのを諷してゐるのでない。古註の体を假りて、あらぬものをあてはめた点に興味を托するだけである。なほ「俳諧鱈」の形式に據れる「傾城鱈」の如く、また武鑑の形式を襲ふ「明和武鑑」の如きに過ぎない。

この書は、いはゆる洒落本の常式物からいへば、埒外にあらう。しかし、「傾城鱈」「娼妃地理記」「滑稽洒落本」を洒落本の部に入れるならば、これもまたその中に數へるのが當然であらう。洒落本と滑稽本とは、

しはしば交錯する場合がある。これもその一例である。

「**京傳の作**、天明八年の板の黄表紙「小倉山時雨珍説」は、百人一首の歌とその作者とによつて、滑稽の案を立てたものであつた。もとより、この書と性質を異にするも、また一脈の相通を見る。寛政六年板の黄表紙「百人一首戯講釋」は、その類作として参照すべきである。これは芝全交の遺作を、京傳の校合出版したものである。

古 契 三 娼

山東京傳の作、天明七年の刊行。

京傳の自序、かふ義の序、京傳の跋、及び政演署名の三遊女の圖がある。本文三十四丁の一冊物。大さ常の如し。

「古契三娼」の名は、虎溪三笑のもちりである事はいふまでもない、虎溪は廬山中の一溪。慧遠法師客を送つて、虎溪を過ぐ、虎輒ち鳴く、陶元亮、陸修靜を送つて與に語る、道合す、覺えず送つて、虎溪を過ぐ、因て大に笑ふ、と「廬山記」にいふのが、いはゆる虎溪三笑である。京傳またこの書に、據るところを明に示すとて、扉に、

陶淵明菊壽帶青樓拾僧慧遠遊南驛稱山陸子靜乘猪牙入油堀と書いてゐる。

京傳のいふ古契とは、古契情である。古遊女である。すなはち、三娼妓の年明けて、人妻となり、妾とな

古契三娼

錢ひとううとあるかゝり江戸のま。それ江戸の
 金屋とす。大引のふ赤の助言とす。ふひとく
 ぞ。城ふ出一鉢金一鉢とせ。唐場と雲ても
 金のなるもの。實生へあるぞ。まに接つるの金盛ハ
 いふもさうなり。大門の仕金場とえて。境ふおびとよ
 雲も刑鞭の柄とるあると思ひ。槽下の火の元
 槽下風の馬とる。馬を四谷の彩者

つてゐるのが、相寄り集つて、おのおのが勤めしてゐた吉原、品川、仲町の風俗について語るのが、この書の趣向である。作者の自序に、

さりや、みつの女肆、言風俗各異にして、人情亦異也、今、中、吉、品の人物をこしらへて、その人情をかたらしむ

といつてゐる。作者がさきに「吉原總籬」に於いて、艶次郎、志庵、喜之助が、もとの吉原の遊女、今の喜之助の女房おちせを相手に、吉原の總籬のうがちをなした趣向を、更に、品川、仲町に及ぼしたものである。作者は、書中の人物、およしをして、かうもいはせてゐる。

わつちもちつとよしはらはなしをしたふすが、ことし總籬といふしやれ本に書盡しひしたから、いふはむだておすよ、このぢう旦那がもつてきておきいたから、よんで見いしたが、すっかり松葉屋ノせかいさ、女郎衆のくせまでかきひした。

この書の吉原の條、すなはち、およしの言葉を、「通言總籬」と參照すれば、發明するところが少くない。「通籬」のおちせの髪は「いなぎむすび」とあるが、この書には、「稻城むすびは扇屋のおかねさんが、いゝはじめた風さ」と見えてゐる。おかねは扇屋の女房である。これは一例に過ぎない。「總籬」には、「羅月が妹は、いづ梅とやうじやのおいくを、そうじめへにしたといふ顔だねへ」とある、その羅月が花川戸の住であることは、この書の京傳の、序の末に、「花川戸羅月が別業、松風亭に毫をとる」とあることによつて知られる。

品川、仲町、吉原と、その風俗を異にするにつけ、客の分野もおのおの定つてゐるので、洒落本また互に

優劣の論をなすものが多い。この書の如く、三者を同じ位置において、平等の言をなすのは少い。京傳の用意が見られる。

女郎買糠味噌汁

赤蜻蛉の作、天明八年の刊行。

京傳の序、作者の自序がある。さし繪二圖、千杏の畫。本文二十丁半の一冊物。大さ常の如し。

この書、一名を「浮世假宅夕口舌」といふ。柱には「しん土」と見ゆ。何の略であるかを知らない。

赤蜻蛉は何人であるかを詳にしない。京傳の序文によれば、相知る間でないやうである。

天明七年十一月吉原の廓内が残りなく焼亡した。例として、假宅の營業が許された。大橋詰、深川新地、八幡前、富永町、高輪及び中洲である。

中洲は安永の頃に、大橋の南方の川岸を埋め立てた新地であつた。水茶屋建ちつゞいて股賑を極めてゐた。洒落本「中洲雀」「大抵御覽」などによつて、概略を知ることが出来る。地はすでに歡樂の境、今また幾軒の娼家が移つて來たのである。客足のしげかつたことは當然である。しかも、客の態度も、おのづから吉原の通の様式を離れて、もつと軽い岡場所氣分であられる。遊女は廓外の空氣に觸れて、どこともなう解放の氣分であると共に、廓内と異なる生活に、一種の寂寥を有つてゐる。この書は、その間の消息を描いて、大きい穿ちを試みようとした。

この作者は、決して傑れた手腕の持主ではなかつた。折角の穿ちも、さまでの冴えを見せなかつた。たゞ

女郎買之糠呆増汁

○ 癸端

日落漲潦三流連とかきこふつと
祢一な江もそハ中洲の新地とて
地ぞ極らくぬき及のまんふを
もさふありなりぬきもなきさみ下
まちまじにけちのふのふより名よ

女本「汁 贈 味 難 之 買 郎 女」

計畫だけは知るに難くない。作者はまづは發端の章に、三客を拉して來た。彼等は吉原の通の衣を脱いで、仕たい放題の騒ぎをする。吉原の娼家に岡場所氣分を發揮するのであつた。

作者は、三客の一人をして、蘭語を用ゐさせ、一人をして、唐音の唄を謡はせる。或は、「和唐珍解」の趣向を襲ふものでないかと思はれる。

作者は、また秋色庵の段に、遊客遊女の魂膽を書いた。拙い案といはねばならなかつた。作者は、また中洲の娼家に、不通客が役者氣取りで登樓することを書いた。役者は、吉原では例として客にとらない、こゝでも遣手が拒まうとする。その侶はいふ、そんな事は町でいへと。そこに假宅らしいことを見せるのが、作者の腹であつたらう。しかも、その客の化の皮は剥がれる。不通の正體が暴露する。趣向はよいが、描寫の筆の伴はぬ憾みが多い。



洲中樓里假

假宅に關する洒落本は少くない。

中に、天明七年度の中洲の假宅を題材としたものに、「假里擇中洲之華美」がある。作者は内新好、天明九年の刊行である。對讀によつて得るところが多からう。「華美」は「はなび」である、烟花である。中洲の舟遊の景物に托して、假宅の一時の盛りを聞かせたのである。同じ見方は、また「女郎買之趣味噺汁」の京傳の序文にも見えてゐる。

こんな世界は唐にもなかず、此川なかにはつと花火の時ならぬさかりを云々

田 舍 談 義

竹塚東子の作、寛政二年の刊行。



繪し「華美」之

山東京傳の序、東子の自序及び京傳の跋がある。さし繪一丁、本文二十七丁、外に附録四丁の一冊物。大さ常の如し。

この作は、洒落本とよりは、むしろ滑稽本といつた方がよい。たゞ、万象亭の「田舎芝居」を洒落本の中におくならば、これもまた洒落本といふべきであらう。少くとも、作者自身は洒落本として扱つてゐる。この作は、「田舎芝居」の模倣である。世界を田舎の劇場と田舎の寺にかへただけで、全體の構想は全く同じものである。

千住近みの金田村の法福寺に談義がある。それを聞きに出かける村の若者の浮世話、また談義場の光景、それを田舎言葉でうつし出してゐる。すべてが、通の世界から見ると異様な相がある。作者は、そこに滑稽を期待してゐる。「田舎芝居」には、村の男と女の戀を配してゐたが、これも、またそれに倣つて、鄙びた戀を點綴してゐる。作者の模倣は至らぬところがない。しかも、努めて原作よりも、あらゆる点に於て、滑稽の度を加へようとする。この戀の場合も、若い男女の外に、後家と僧の一組を添へてゐる。さういふ戀のかかしさを、更に別の方から傳へようとしたのが、附録の二通の手紙である。村郎村嬢の戀文に擬してゐる。

「田舎芝居」の作者が、わざと、洒落本界に田舎と滑稽とを將來したのは、その頃の洒落本作者の穿ちの度はづれに嫌らないためであつた。それがために、穿ちの作者京傳と絶交するに至つたとのことである。しかし、「田舎談義」の作者には、さういふ主張はなかつた。彼は「田舎芝居」の奇想を喜んで、その趣向を襲つたに過ぎなかつた。たゞ注意すべきは、洒落本の穿ちは、万象亭の異議を眼中におかずに、なほ段々と穿ちの度を増してゆく一方、「道中粹語録」から「田舎芝居」まではこの模倣作と、漸く滑稽本に近づくものも相應に

[illegible]

竹塚翁述東子

いとはなはをさうりやふ



あんなにちの
まはひも
うさ
いまま
オッ
い

[illegible]

出て来たことである。作柄から見ても決して傑れてゐないこの「田舎談義」を、「田舎芝居」との重複をいはずに、本集の選外におかなかつた理由は、一にかゝる歴史的意義からである。

こゝにまた、注意すべきは、この書に於ける京傳の序跋である。序跋は本文の中に挿んで、前後相應じて、この作を紹介する形をとつてゐる。あの万象亭との絶交問題に信をおくとすれば、京傳がかうまで丁寧な扱ひをしたことが、かなりの矛盾になる。京傳の態度が變つたためであるか、それとも東子との間に、特殊な關係があつて然るか、疑問である。

作者東子は一に風水房と號した。千住附近竹塚の農である。はじめ法橋越谷吾山の門に入つて俳諧を學んだが、後戯作に轉じた。「田舎談義」は彼の作の刊行された最初のものではあらう。いづれ、當時入銀といつてゐた出版費負擔の下に、京傳の紹介によつて、世に出たものであらう。

東子の模倣癖はなみなみならぬものがあつた。彼の黄表紙の初作、寛政三年板の「高橋至無我人鼻心神」の如きは、最もよくこれを語つてゐる。春町の「高慢齋行脚日記」と京傳の「江戸生艶氣棒燒」を合はせて模倣したものである。また、卷末に、京傳の狂歌を掲げ、それに對する「京傳作」を利用して、作全體のものらしく見せかけようとしてゐる。彼の露骨な賣名ぶりが見られる。

手段
詰物
娼妓
絹籠

山東京傳の作、寛政三年の刊行。

柳浪館主人の「西江月」の序、京傳の自序、曼鬼武の跋がある。さし繪一丁、京傳の自畫、本文三十七丁

の一冊物、大さ常の如し。

この書に數種がある。

柳浪館の序、曼鬼武の跋を缺いて、京傳の自序のみがある方のは、さし繪もわづかながら相異してゐる。これは後の板であらう。また、以上の序跋三章を具へる外に、煙花浪子の跋を附したものである。

これと、序跋三章の書は、繪も、本文も、表紙も全く同じものである。また、曼鬼武の跋

の紙端には、尾といふ文字が見えてゐる。或は、序跋三章の本がはじめに出来、次に、煙花浪子の跋を添加したのでなからうか。煙花浪子は京傳艸廬食客と肩書してある。おもふに、京傳の變名であらう。印影にも「有



紙表「簾綃妓娼」

手段詰物娼妓絹簾

山東京傳著

○第一回

義理と情交ニタ及ぶ基子もあ

ぬ梅門が飛車と王女

□沙糖玉の丁兒甘兒ときくむ鰻鱺屋
の摘兒苺とこの海ど李白一斗詩百篇
といふ秋一底ねちも叙養と居風呂と

後叙
 花炮家も力揚として點
 一と不覧を不買膏藥
 も脚と創て不觀ハ不賣
 況賣情娼妓はおもてをや
 應馬呼牛ふえんを安ん

魚うしほもも娼妓しょうぎ子こ 既すで日ひの季ゆき
 指さああくく自こ有もの盟めい章しやうも
 形かたちしし彼かれ子こ截き了りやう是これ子こ誓ちか言ふ
 多おほ牙をと多おほつつれ業けう子こ憐あはれみひし
 高たか飛ひ乃のちちも美び食しよくと死ちす
 深ふか泉せんの魚うしほも芳ほう餌いと死しす

娼妓も亦潘安世たり
 誤りあり。豈虚のみ
 るん乎。雖然未き寸
 娼妓子正礼附請合賣
 乃あそびを。余以為其
 實を信ぜば其虚以

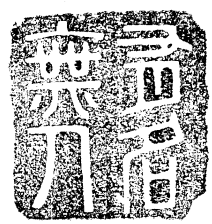
友一

惡くま ぐ の 輒こゝろ 是これ 識し 趣そ 人の

京傳艸廬食客

煙花浪子跋

如 之



名無人」と讀まれる。

「娼妓絹籠」の題は、「將棋絹籠」のもぢりであらう、その頃、さういふ題名の將棋の書があつた筈である。京傳は客と遊女との魂膽手管を將棋の手と見なして、その書名を假りたのである。

書かれてゐることは、いろ／＼の手ではない。義理と情の二道に、どうも動きがつかず、間基子もならぬはつになつた遊女の飛車手王手である。梅川忠兵衛の世界であるとして、忠兵衛に實意を盡す梅川の心意氣が主になつてゐる。もうこの頃の洒落本は、魂膽手管を描いて、微に入り細を穿つてゐる。これを客の種類で分け、遊女の手管に品目を設けるほどになつてゐる。たとへば、息子株、牽頭醫者、武左、俠客、色客と書きわけた振鷺亭の「自惚鏡」があれば、これと態度を同じうしながら、分野を遊女にかへて、しつぽりとした手、やすい手、見ぬかれた手、そは／＼する手、眞の手を書きわけた京傳の「傾城買四十八手」があつた。「自惚鏡」は天明八年、「四十八手」は寛政二年、二者の間に多少の關係があるやうである。「娼妓絹籠」の趣向は、この順序を追うて成立したのである。すなはち、「四十八手」の眞の手を、梅川忠兵衛の事件に托して、精細に描寫したのであつた。

京傳は、つい、これまでの洒落本にないものを扱つた。遊女が懷妊して、寮で休養してゐることである。そして、夢の趣向で、さうなるまでの眞の戀を書いたのである。浮き浮きした洒落本の世界に、一脈の哀愁を漂はせたのである。そのやさしみが、「花折紙」をして、若女形の部におかせたのである。評言にも、「扱夢のくるわ揚屋の榮、第一はんめ、頃しもそよふ秋風の目には箕の輪の別莊にいとゞ病氣のものあはれるうち、大きにうけとりました」とも見えてゐる。後の爲永春水の作に、少なからぬ影響を與へてゐるほど

に、人情本脈が動いてゐる。

京傳は、一讀すれば吉原であることが明であるにも拘はらず、世界を大坂新町だといつてゐる。また、巻頭には題材とふさはしからぬ好色の戒をいつてゐる。それには、理由があつたらう。

その頃、風紀問題から洒落本に對して取締のありさうなとり沙汰がなかつたらうか。その噂が實現されたのが、二年十月二十七日の洒落本禁止令でなかつたらうか。板元萬屋重三郎は、發令以前、取締に對する處置を京傳と相談した、京傳はわざと江戸をよけ、教訓らしく見せる案を立てたのでなからうか。しかし、その案では安全を期し得られないほど嚴重な取締令である。板元は、こゝに冒險を試みた。この書を袋入りとして、袋には「教訓讀本」と題して、翌三年の春出版した。「仕掛文庫」「錦之裏」もまた同じ體裁で出版した。何分にも、洒落本禁止のところへ、この新趣向の作が出たのである。驚くべき流行であつた。事聞えて、京傳も、板元も、處分をうけ、それ等の書は絶板を命ぜられた、京傳の刑は手鎖五十日であつた、三年三月のことであつた。

京傳は、この事あつて以來洒落本の筆を斷つた。けだし、これは、京傳の最後の洒落本として記念すべき書であつた。この書はまた別の意味からも、京傳にとつては、記念の書であつた、といふのは、彼が原稿料を得た最初のものであつたからである。看代として一兩を得たといはれてゐる。京傳に對する吟味始末書の中にも「絹嚢」「仕掛文庫」「錦之裏」は、作料筆工紙一枚には代銀一匁づ、三部代百四十六匁、金に直し、金二兩三分銀十一匁と見えてゐる。

青樓畫
の世界 錦 之 裏

山東京傳の作、寛政三年の刊行。

自序、附言、及び跋がある、皆京傳の筆に係る。京傳自譏のさし繪二丁、たゞし、その一丁は黄表紙のやうに、本文を合はせ刻してゐる。本文三十三丁の一冊物、大さ常の如し。

題號の由來は、自序に見えてゐる。

妄作^{むかし}の茶表紙も、年々歳穴相似て、歳々年々趣向新しからざれば、一ツぐつと捻てみた青樓の畫の世界、夜の景色の花美とはうつて變つた案じの小冊、此奴は一ツ新織ならめと、其儘錦の裏と題す而已

書かれてゐる世界は吉原の五ツ時から四ツ、九ツ、八ツ、七ツ時まで、すなはち午前八時から午後四時までの情景をうつしてゐる。時のおのおのを示すために、時計の圖を挿入してゐる。この趣向が、後に、一九の黄表紙「吉原時計草」となり、また六樹園の戯文「吉原十二時」となつた。また、時計の圖の挿入の案は、そのまゝに、三馬の「浮世床」「浮世風呂」に襲用せられたのである。

京傳は、この書に於いて、最も精しく吉原のうがちをしてゐる。また遊女の生活の内幕を發いてゐる。月の半ばを吉原で遊び暮してゐたといふ彼の體驗があつて、はじめて書き得るものであつた。彼は吉原の日常生活をさうまで書くと共に、それを背景とした非常事件を書いてゐる。遊女が害のほどから忍ばせておく色客に對する心づかひである。その心づかひが、「四十八手」の眞の手の延長である。尤も、この書と「四十八手」の關係は、書中、ある一事項の説明に、彼の書を参照すべきことをいつてゐるのも明である。

青樓畫之世界錦之裏

山東京傳戲作

五更鳥

ガアアア

晨鐘

ホラウシ

紙砧の音

ユツユツ

商人の聲

油あげ

ウツウツ

夫神靈矢口渡道行の文句曰なまふことと

萩のゆめふはまきとくもやもとまきと

乃常勝風よくひくまへ好まかり浦島

珠匣硝子

乃梳皿

まわし秘と明あてや

京傳は、その客と遊女とを夕霧伊左衛門に托してゐる。夕霧が伊左に對する實意としてゐる。京傳は、また作の片だけを、後一條の御宇とし、神崎の廓としてゐる。少くとも起筆をば讀本らしく見せようとした。

例の取締に對する用意であつたらう。その用意はまた附言及び跋に於いて見られる。特に附言に「喜怒哀樂の人情を述て、勸善懲惡の微意あり」といひ、「此小冊に教訓の二字を冠しむること所以なきといふべからず乎、視人宜察也」といつてゐるのは、勿論袋の上の「教訓讀本」に應ずるものであることが明である。



金樓乃世家録
 一日書肆唐丸
 曰例此小冊の案
 とあやや



京傳及び板元蔦屋が處刑された時、地本問屋行事兩人も連坐した、商賣御かまひの上退放されたのである。寛政二年十月の取締令では、刊行書は行事の改めを受けて後出版すべきこと、行事の改方が不行届ならば、行事の越度となるといふことがあつた。「網籠」「書之錦」「仕懸文庫」は、教訓風の序跋、また讀本風の扱ひ、及び洒落本の例である土器色の表紙を、赤褐色、また模様入りなどに變へたことによつて、幸に行事の眼をくらし得たのであらうか。それとも、行事と暗々裏の諒解があつたのであらうか、とにかく行事等は許可を與へた。それが、改方不行届として、罰せられたのである。こゝに掲げてある「錦の裏」の序文の中にあつた「極」の印は、行事が許可済の印章である。

大磯 風俗 仕懸 文庫

山東京傳の作、寛政三年の刊行。

作者の自叙、跋がある。さし繪二圖、一丁半、京傳の自書である。本文四十三丁の一冊物、大さ常の如し。扉には、特に、「大磯廓中光景、鎌倉遊子傳記」と銘うつてゐる。叙は、その意を敷衍して、頻りに今の時風でないことを説いてゐる。跋は教訓の意を説いてゐる。また日録は讀本風の題目にしてゐる。すべて、取締の眼を避ける手段である。しかし、一讀すれば、誰しも合點することが出来るやうに深川仲町の穿ちであつた。されば、取締令に觸れて、處罰された折の吟味始末書にも、

仕掛文庫と申は、御當地深川邊料理茶屋にて遊興致候體を合含、並古來より歌舞伎芝居にて狂言仕候會我物語の趣向に、當地の風俗を古今に準へ書つゞり云々

大磯仕懸文庫 山東京傳著

第一回

東山小妓と携り漢土の驕者もいず
繰皂舗の出番のちりきり騒び酒肆
乃枝菰ぐりてたのしき事成るべし
寢小後鳥羽院の御宇文治建久の昔
鎌倉の寢小あろく一ツの女驛あり
と名づく寢小あろく一ツの女驛あり

といつてゐる。

「仕懸文庫」といふのも、すぐに仲町を聯想させる題名であつた。作者は書中に、

仕懸文庫といふは、子どもの着がへを入りて来た文庫なり、大磯にて着物をしかけといふ事人の知る所なり、尤仕懸文庫を持せる事は繩町にかぎるゆへに、此冊子の外題とすとも自註してゐる。大磯の深川、繩町の仲町を意味することはいふまでもない。

さすがに、京傳は曾我の趣向のはめ込みも巧みであつた。朝比奈を深川通とし、曾我十郎を吉原客の深川不通とし、十郎の案内の格で、細い穿ちをいふことにしてゐる。京傳はまた深川の遊女の魂膽をみせる。ために、おてうと色客曾我五郎の實意を描いてゐる。色敵に梶原源太を据ゑて、曾我の表面をとり繕うてゐる。おてうは五郎のために、強工面をする、それがために髪のもも少くなり、仕懸の数も減る境涯にあつた。題名の「仕懸文庫」をそこで利かせてゐる。

京傳の深川物が爲永春水に與へた影響は多い。殊に、この書の如く、深川の背景と魂膽とに亘つて、穿ちの細かいものは、春水の御手本として恰好のものである。彼はいさゝかの増補を加へて、「新秋宴語辰巳月」といふ中本三冊を作つた。山東京傳舊作爲永春水増補と銘うつた。彼は、「仕懸文庫」の板本を利用の出来るだけ利用した。それがために、丁附が妙にならうが、またお蝶綱五郎の戀物語としてあるにも拘はらず、とんだところで曾我五郎が頭を出すのも構はなかつた。尤も、「仕懸文庫」の後摺本には、装幀だけを中本にしたものもあつた。たしかに、わづかに仕立かへれば、人情本になり得る素質は、京傳の最初の用意が用意だけに多かつたのである。

石場
妓談 辰巳婦言

式亭三馬の作、寛政十年の刊行。

關東米の序、作者の自序、また純々亭主人祭和樽の跋、式亭門人樂山人馬笑の跋がある。さし繪一丁。歌麿の畫、洒落本としては珍しい彩色畫である。凡例の一丁また彩色を施してゐる。尤も後摺のものには彩色がない。外に「發語」の一章がある。本文四十一丁の一冊物、大さ常の如し。

彩色入りの大い方形の題簽、貸本屋と客の言葉が本文同様の書式で書いてある。「ハイ新板のしやれ本が出来ました、まだ封切でムリ」。「ム、なんだ、石場妓談辰巳婦言 完 式亭三馬著 新しい趣向だ、こいつは面白からふ」この題簽の趣向は必ずしも新案でないが、まづ類の少い方である。全體として、この書は體裁の上になみなみなぬ凝りやうであつた。

世界は深川古石場である。凡例に「名家の糟粕を嘗て予が分に應じたる新市場の世界を著す」とある新市場は、新石場の假託であつて、新は古の誤である。この後編「船頭深話」の附言にも「先年先人の糟粕をねぶりて辰巳婦言一冊を著す、幸に世に行はれり、尤古市場の小説、他に類書なし、依之則ち後篇を作して以て外場所通の一笑に備ふる而已」と見えてゐる。古市場の假託は、深川を鎌倉手越宿とした延長である。

作者は、古石場の世界に、女郎一人に客三人の手くだの智慧競を書いた。「手ごはくかゝれる段」として、高慢客藤兵衛が女郎おとまの手管に乗て金をとられる經緯を書き、「うまくかゝれる段」として、息子株喜之助がおとまの髮切りの手段にかゝる始終を書き、「しんにもてる段」としておとまが色客の俠者長五郎にせる

實意の有様を書いた。作者はまた古石場の氣分を出さうとして、「あくてん遊び三人一座の段」を書いた。三人の客が女郎の來ない腹癪せに惡じやれの大騒ぎを演ずることである。これ等の事どもを、時間の區分の下に書いた。四ツ明の部、晝遊の部、宵立の部である。なほ、朝直の部、宵泊の部をも書く豫定であつた。

この時間の區分は、おそろく、京傳の「晝之錦」の工夫を模倣したのではないかと思はれる。そればかりか「仕懸文庫」「四十八手」などの趣向を踏襲してゐることは、少しく對照することによつて、容易にいはいれ得る。深川を鎌倉の遊里に託するなども、そこに基づいてゐる。その他一々の例を挙げずとものことであらう。要するに、三馬の例の模倣の現はれである。

さすがに、三馬は、模倣を

古石場



新 國 劇

以てこの作をなしたとはいひながら、三馬の三馬たるものを十分に發揮してゐる。會話の洒落までも京傳のをそのまま用ゐる場合も、すっかり氣分を變へさせてゐる。三馬にいはせれば、趣回立は先人の糟粕を嘗めてもよい、風俗言語の細かいところを見て貰ひたいとのことであらう。彼の辛辣な觀察が、遊客遊女に對して下されること、なほ彼の他の作品と同様である。巻尾におとまの出所をいふところなどに注意すべきである。

この書出で、七年の後、後編「船頭深話」を書いた。文化三年板である。その翌年三編「船頭部屋」を出した。凡例にいつてゐる。

唱門圖



「諸」さし繪

石塲 辰巳婦言

式亭主人著

半夜鐘

ホラレ

夜半鐘

カケリくみきき

バクトリクたる料理番の煙板を良き

く棧橋の声竹屋くアイリ返河

をくくを煮て船頭の魂廊下納く

屋わか樹のどくお客さようけ美音忽ち

野眠と衣で柿鮓のどく傍み熟枝臭

前篇の二書に古市場の穴を穿ち、風俗言語の趣は盡したれば、おとまが眞實を主とし、聊流行をくはふ、前後參考して其の花實を知り給ふべし。

おとまは藤兵衛、喜之助、長五郎の三巴はいろいろあつて、つひに、おとまは喜之助と一緒にすることになる。洒落本の續物と人情本の關係が明である。この前後三編が、春水の「梅兒譽美」に多くの影響を與へ、殊に、この藤兵衛とかの藤兵衛との間に、太い絲の結びがあることも、最も明白な事實である。

滑稽本作者として聞えてゐる三馬の傳は、今更に一言を要すまい。たゞ洒落本の作は、生涯を通じて、さまで多くなかつた。中に「傾城買談客物語」などの注意すべきものもあるが、「辰巳婦言」を以て第一に推さねばならぬ。

傾城買二筋道

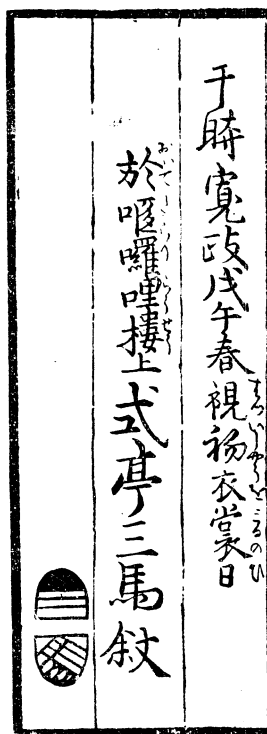
梅暮里谷峨の作、寛政十年の刊行。



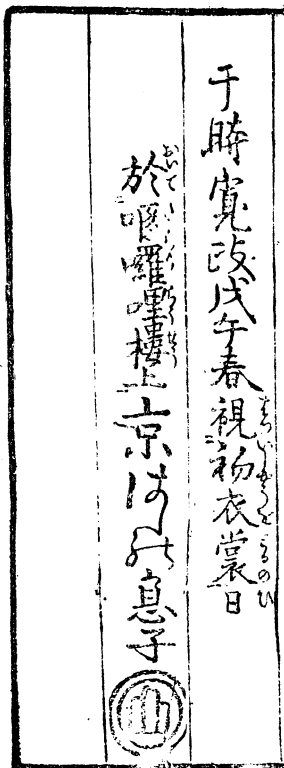
三馬「鑑」澤川 雲光 繪城

京はしの息子署名の序、作者の自序、及び自跋がある。さし繪一丁、雪華の畫、本文四十二丁の一冊物中本形。また小本形のものもある。

この書に形の大小に拘はらず、板の變つた二本がある。一は京はしの息子署名の序文があるもの、一は同じ式亭三馬叙と署してあるものである。前者の京はしの息子といひ、また印章といひ、共に山



名著の文序



名著の文序

傾城買二筋道

谷巖作

○夏れ床

世界ハ小見勢客ハ二十五六のそいなる乃ハ
さいろ男にて腕どころあきんど已腕の未至通
な地中り同前通方ハ二十ニたいていさうい
くくそあきんどさきんさうてさきん四
五會め

水瀬子て合なりやま夜半の短うちよけれどもおきやう
ごと休寐のぬーよ口ていさんどさきんさうのさきと

東京傳を聯想させるが、おそらく三馬のさかしらであり、後者はこの書の流行につれて、三馬が本名を現はしたのであらうか。前後の序を通じて「嘸囉哩樓」とあるが、これは三馬の別號であつた。多分前者が最初のものであり、後者が後のものであらう。前者の本文は漢字が多く、後者は假名が多い、たとへば、ずつとはじめの方に、「廣小路の十哲のうちでは韻淵がくせんといふものだせ」と前者にあるのが、後者では「かんへんといふものだせ」になつてゐる。多分、後の板では、そのやうな洒落はどうでもよい、筋で讀まうの讀者のために、彫り直したのでないかと思はれる。

世界は吉原である。夏の床と冬の床の二部に分れてゐる。夏の床では、俠肌に行すぎが遊女に金の無心を

二筋道後篇の舞 梅魯堂谷我著

○宵き

浮名うけの生疑くさ 客文里
幕下重

何う要たいうおん、客を客のうこそ
あや片ふふまかれ命をくも個子小

声こゝろをゆゑと初る

人々を去のみを、月もあつて

心のを海へ、おちるもあつたや

してつき出されることを書き、冬の床では、醜いけれど深切な男が、遊女にふられ通してあるにも拘はらず、三年も通つて、實意を見せ、つひに深間になることを書いてゐる。作者の意は、客の淺薄と深情とを書き分けることであつたらう、「二筋道」の題意もそこにあつたらう。

例の「花折紙」は、冬の床を評して、

つぎに晝三がい、文里となられての
しうちしつとりとやられまする鹽梅、
見物の落涙をもよふさるゝ所、出来
ましたく。

といつてゐた。客文里が遊女一重に對する深情は、大方ならぬ好評を博した。そろそろと洒落本界に人情本の脉が強く持ち出した頃であつたからだらう。一度人情本的趣向で見ると、一重がつひに文里の情にひかれて心から契ること、また、

文里が女房子供を思ひながら、一重を忘れかねる惡縁のことが、どうしても後編の存在を要求する。その要求に應じて、作者は、翌十一年に、「後編廓の癖」を出し、そのまた翌年十二年に、「三編宵の程」を出した

二筋道三篇宵の程

梅暮里谷峨著

② 第一 冬のふえ

久々今集又契りしことを文里は
ちかひておもひにうけふ縁はとて
どろろれはわどやあひとも見くろれを
世の中のなれどもさても又うねる
文里の二重よりれう月あれど

のである。

後編三編となると、「二筋道」の題號がずつと變つて、義理と情の二筋道といふことになる。文里は一重に熱したために、家の首尾が悪くなつて勘當をさへうける。一重はまた文里の妻に對する義理合から、一日も逢はずにゐられない文里と離れようとする。それがもとで病氣となる。しかし最後は作者谷峨のはからひで、文里も勘當赦免となり、一重も妾としてひきとられることとなる。殆ど人情本の作風であつた。

作者谷峨通稱反町三郎助、江戸住の久留米藩士であつた。江戸本所埋堀邸に住んでゐたので、この戲名があつた。戲作の書ほど二十種、しかし「二筋道」ほどの當りをとつたものはなかつた。

讚 極 史

千代丘草庵主人の作、寛政年間の刊行。

作者千代丘草庵主人の何者であるか明でない。刊行の寛政年間であることは、書中の記事から推定される。「中洲のはつかふ時ぶん花火を見る船からあんじた謀計サ」といふので、中洲とり拂ひ後、さまで時の經たない時が考へられるし、殊に、「新渡の近世畸人位といふ書を見たが宮奇の竹の圖がでゝゐる」とある「近世畸人位」すなはち伴蒿溪の「近世畸人傳」の刊行は寛政二年であることから、ほどこの書の刊行の時を考へられよう。

鶴邊庵さほ丸の序、泉樓主人の跋、外に葛飾北齋畫のさし繪一丁、彩色を施したのがある。本文二十五丁半の一冊物。形常の如し。

三國の英雄、蜀、魏、呉、孫權、魏、曹操、
 天下を三分し、そのふとさうとの急をう
 へ、一統せん、はるる、呉、魏、蜀、
 おう、はるる、を降き、こゝろ、争はる、
 ちれる、と、玄徳、孔明、ふ、まゐ、
 へ、つ、も、り、れ、あ、は、る、
 引、今、八、国、ふ、あ、る、は、
 今、八、国、ふ、あ、る、は、

「讀極史」の別號は「三國志」のもぢりであることは勿論である。講談としての「三國志」の流行は、戯作の趣向にも、題名にも、與へるところが多かつた。これもその一例である。「讀極」の文字は、さほ丸の序では、この書の妙作を賞めたことになつてゐるは、それは戯言で、本來は、時の流行に對する禮讃の意であらう。

この書の趣向は、玄德、孫權、曹操を三通客とし、それ等の會談によつて、時の流行を紹介することであつた。しかも一人を甘黨としたのも、名物の菓子を數へさせる手段であつた。更にまた一趣向があるといふのは「三國志」の戲解である。たとへば、玄德、關羽、張飛が桃林に天地を祭つて、兄弟の義を結んだ事件も、これには、輕い當世風に變



志國三本古

へられてゐる。

三人共兄弟ぶんさ、

しろかね町の田みせ
の高なほの桃林で義
をむすんだのさ。

桃林もつひに高輪茶屋

にされたのである。また

曹子建の詩も、これでは

狂歌にされてゐる。

先生の次男曹子建は

狂歌は妙だ、先度角

半で一座しやしたが、

日本の雄長老、豊

藏坊、未得貞柳もは

でした、よつはらいながら七足のうちに豆の狂歌をしたかおそろしいよ。

からいふ洒落も、いつもの和漢古典戯解の常であるが、舞臺が舞臺だけに、大きく働きかけてゐる。殊に、當時の流行語、「これは日本だ」が、名物の賞美言葉として、巧みなはめ込みになつてゐる。また、三人が肉



桃園共契頓教龍虎會風雲

通俗漢語挿話

を食ふことから、妙な日本自慢も出て来る。「菓子と女と紙は日本がきつい物さ」「どうして」「まづ女が牛はくわねへからくさくねへ、紙はちやのやうにきけやすくねへよ」「紙はいらねへが、女は浦山だ、とふもおいらが奥の女中部やでぶたや牛猿の帆立貝をせよるから、いきがくさくつてこまりやす」などともいひあつてゐる。

寛政といへば、寶曆の支那趣味流行の後をうけて、彼土の文人の遊びに倣つてゐた。この書には、それ等の空氣が充滿してゐる。この頃の日本の流行は煎茶の會に、墨跡の交易なども見えてゐる。その點に於いて、白舟作、寛政十二年板の「昇平樂」を参照するのも面白からう。これは大坂に於ける文墨嬉遊の通人の會談の洒落本である。中にまた支那趣味の動きが著しい。

娼妓
美談 籬 の 花

籬の花 後編

廓 宇 久 爲 壽

共に、鼻山人の作、「籬の花」は文化十四年、「廓宇久爲壽」は翌年、文政元年の刊行。

「籬の花」には、鼻山人の自序がある。さし繪一丁、北溪の畫、本文三十七丁半の一冊物、「廓宇久爲壽」は自序、及びさし繪一丁、英齋白水の畫、本文四十丁半の一冊物。二者ともに、大さ常の如し。

「籬の花」は前章後章にわかれる。世界は吉原。梅川は忠兵衛に貢ぐ金のために、心ならずも八右衛門をあひしらつてゐる。これが前章、其角の句、鶯や梅はさほどに思はねどを題とする。忠兵衛はもしかして、梅

増補
美談

離の花

鼻山人著

○
菊章の宝晋齋其角が秀白
宇之爲壽や拂はされどもおのれと

本朝文粹卷の九論文の中ふたえの人いそふと
あも前山の璞美ありといえども瑤ざねはらの密と
あふむと人實ある或蘭姿蕙質傾国の色と
情の仲の町なるといふを地の大漆人もは案の
かみて走る教湯の風のまふノ一入無のなまめ

籬の光

後鱗

山人著

鄭宇久為壽

○前章

花街の春色。柳栢の光景。俯て寮仰で観や
言。惜をその。四季俱ふ。紅白妍を争ひて。貴妃を
欺き。李夫人を壓む。その章臺に登るの。獲者
黄金を研のふ。鼎を燂のふふ。扱て聊るも

川の心が八右衛門に靡きはせぬかの疑心からぶち打擲する。これが後章、祇徳の句、鶯やあまりに愛てこぼれ梅を題とする。

後編また前後の二章に分かれる。前章は、忠兵衛が梅川に對する腹癒せから、舞鶴をよぶ、舞鶴は初會から忠兵衛をよくもてなす、忠兵衛は、腕に入墨した梅川の名を消す。後章は、忠兵衛が一時の怒からの自暴遊びに、金に困つたのを、梅川から金を恵まれる。二人は和解する。

この書は、はじめから、前後二編を豫定されてゐた。これを四章に分つのも、起承轉結の脚色を期待してゐたためであらう。その企圖があまりに露はに過ぎるほどに、事を運んでゐる。

作者の態度に於いて、また續編を有つことに於いて、洒落本といふよりは、むしろ人情本といふべきであらう。たゞ小本仕立なのが、形式的に人情本と區別させるぐらゐである。その二書を合はせて、本集に選んだのも、畢竟、過渡期に於ける洒落本を代表させるためである。作が傑出してゐるためでないことは勿論である。

娼妓の、誠と、雞卵の四角、あれば、晦暮に大陰つみも幽こもと、謠ひ物せしは、其理を不究ふきゆうの論、可耻かじの妄誕也。と序文にいつてゐるやうに、作者は娼妓の實情をうつし出さうとしたのである。すなはち、京傳のいふところの眞の手を覗つたのである。しかし、京傳の妙筆とは、つひに比較することは出来ない。こゝに京傳と思ふのも當然である。何となれば、この作は、京傳の「娼妓絹邊」に負ふことが多いからである。最も見易い例は、梅川の新造梅ざとが、梅川を庇つて忠兵衛に逢はせるあたりは、「絹邊」の梅春の行方を眞似たのであつたらうし、殊に、事の結びを、箕輪の別荘に病氣保養の引籠中、新造梅春に看護されてゐる床の中の夢と

したなど、いよいよ摸倣の跡の歴々たるものがある。

作者鼻山人は一に東里山人といつた。本名は細川浪次郎、御家人であつた。京傳の門人である。印章を京傳鼻にしたのもそれがためであらう。彼は黄表紙合巻の作も多かつたが、洒落本數種また人情本三十餘種の作があつた。その洒落本も作風大方人情本に近いことは、「籬の花」「廓宇久爲壽」これを代表してゐる。

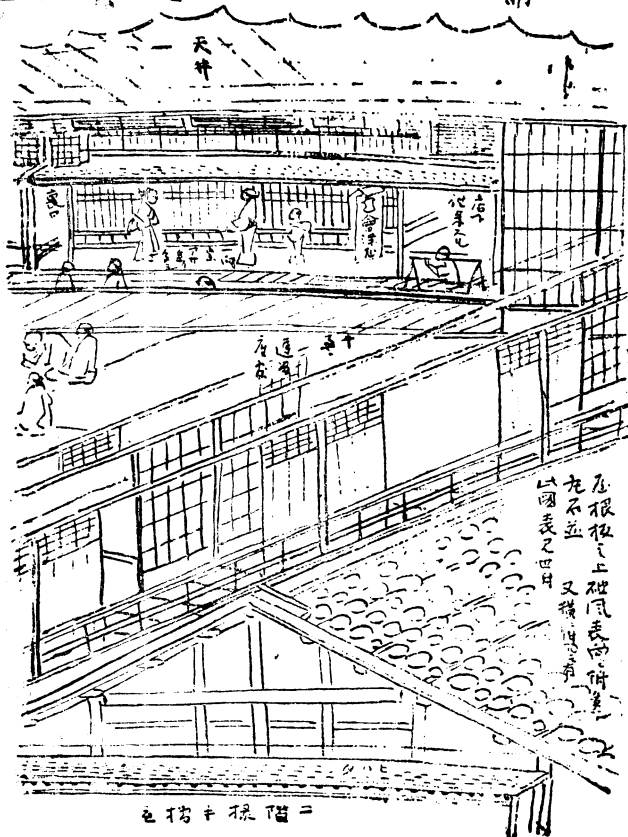
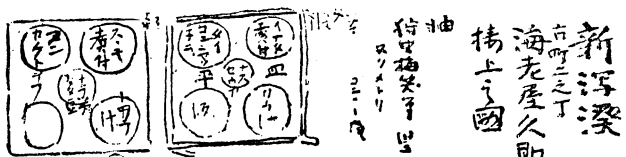
新潟後の月見

作者署名なし、文政二年の刊行。

新写繁昌記
八百八拾家
後の月見全

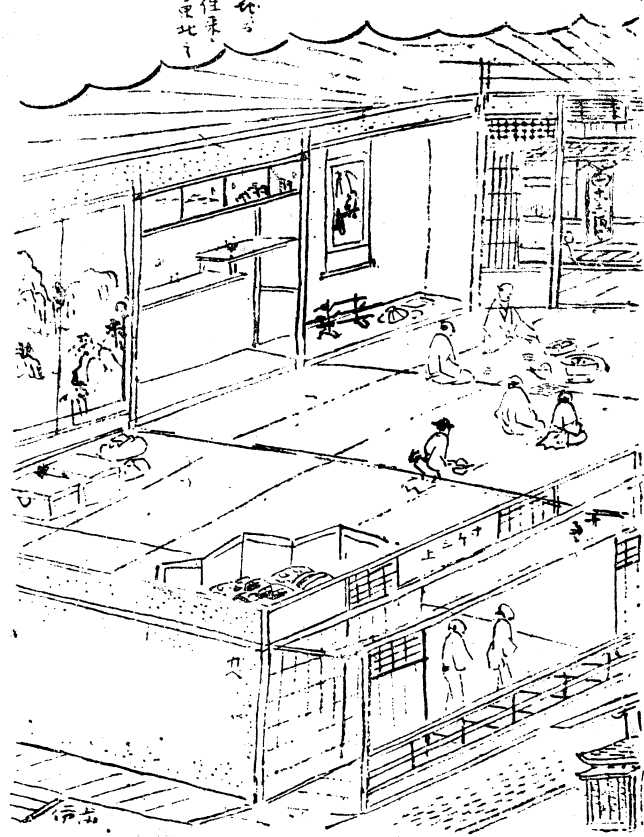
「後の月見」題箋

表紙の裏に、鍋輔の書贊があり、巻尾また鍋輔の書贊がある。作者はこの鍋輔でないかと思はれるが明でない。



原北筆且雪

環珠亭
 長岡城主
 牧野備前守様御領分
 江戸一百八里
 善光寺へ五千里
 新海渡船路あり
 陸路諸君より住居
 ありて南へ併に東に
 あり



い。またその人となりを知らない。おそらく、新潟の通士であつたらう。

湊之圖、熊谷小路之圖、嶋の圖、寺町之圖二面、白山祭禮傾城宮參之圖、旅籠町之圖、仲道之圖、鍋輔の

畫賛二圖と合はせて、さ

し繪すべて七丁半。本文

五丁、外に作者の序と凡

例二丁がある。中本形で

ある。作者の自序には、

文政二卯の年の春と見え

てゐる。

この書には、二度の摺

がある。二度目のは、表

紙裏の鍋輔の賛ある繪を

省き、筑紫甘泉醉翁の序

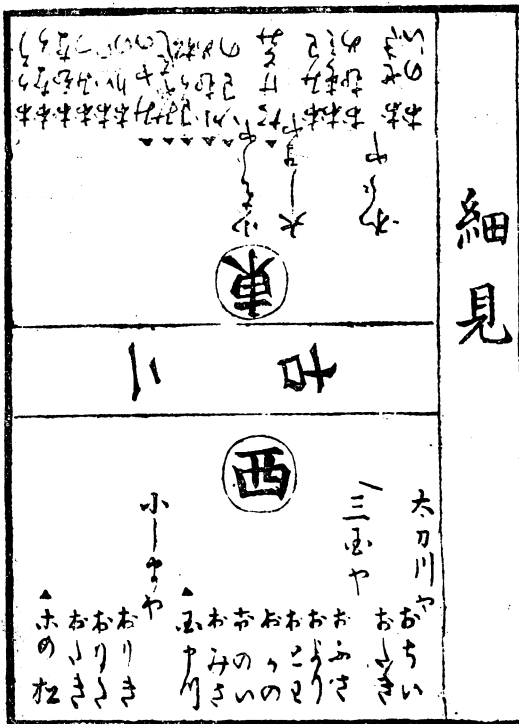
を附してゐる。序には、

辰の年初秋日と著してゐ

る。これは、また作者自

序の「文政二卯の」を削

細見



文政二年

〔見細鴻新〕

た。殊に、この書の作者の意は、洒落本の扱ひにあると考へられる。此八百八後家も、あるひはその人のしなにより、またはわかれしひと有さまによりて、あた名をつくる

[illegible]

なりけり、あげておろきぬをやね石後家とよへば、入てしめるを巾着後家と名するたぐひ、皆こと／＼にゆゑよしあれば、此まきをひらき見て、其よしをしり給へね。

と自序にいふが如く、新潟の土妓に八百、後家の名あるを利用して、ほど二百の譯名をつけ、これに戲釋を加へたのである、すなはち、見立物の一類である。

洒落本は、その成立の當初から、殆ど遊里を中心としてゐた。遊里のあるところ、必ずや、細見あるべく、案内の書あるべく、また洒落本があるべきであつた。しかも、洒落本界の情勢は、種々の事情のもとに、洒落本を江戸に飽離させた。たまたま、各地遊里の洒落本があるといふも、その数は少い。この書の如き、その少き中に於いて、かなり注意せられた作である。

八百八後家の名の本づくところを知らない。江戸の儒寺門靜軒、かつて新潟に遊んで、「新潟富史」の著があつた。新潟の遊里について述べてゐる。古町の遊女は最も優れた者かゝる、江戸の妓に比して、必ずしも遜色がない。熊谷小路に住むのは、その次である。脱奔小路に住む者は、江戸の切店同様の賤妓である。かう述べた後、八百八後家の名について、説いてゐる。

「昔者無^レ有^ニ娼妓^一、寡婦^{無^レ依^ル者^一、陪^レ酒^{奉^レ情^一}、是爲^ニ土妓^一之起本^一、今^レ後家^{殆^ド絶^レ種^一、世所^レ謂^ニ八百八^一、婦^レ子^{耳^一}。八百之稱、今不^レ詳^ニ其由^一、或言取^ニ諸^一八千八百^一、或言不^レ過^ニ稱^一數之多^一、與^{下^ニ呼^ニ菜肆^一、曰^ハ八百^ト、或然^一。}}}

新潟の地の船着場としての賑ひは、その遊里をして、特殊の發達をなさせた。甘泉醉翁の序すでにこれをいふ。靜軒の醉詩更にこれを盡してゐる。

八千餘水合^{シテ}走^リ洋^ヲ、七十多橋分界^テ坊^ヲ、人居稠密何熱鬧^{ナル}、商帆輻湊自^コ、方^ニ、絲聲鼓韻^{シテ}晚^ニ、歌吹之、海脂粉鄉、嬌摸嬌樣嬌紅粧、坊中多半是女郎、就^テ中^ニ、有^ニ種^ノ老娼妓、所謂八百八家嬌、嬌嬌淡粧娘濃抹、嬋妍詞^ヲ、媚綺羅香、洞房春暖^{ナリ}、鴛鴦被、流連莫^シ箇不^レ倒^レ囊^ヲ、誰憐^{カム}老客情境冷、且呼^コニ盃^ニ、酒^ニ枯腸^ヲ、孤枕支^テ醉夢易^シ驚^キ、絲聲猶攪^ス月三更。

靜軒の新湯遊行以前、江戸の畫家長谷川雪且がそこに遊んで、遊里の狀を描いた。稿本藏して林文庫にあり、その一二圖を抜いて、參考に資する。

「後の月見」が刊行された文政二年には、「新湯細見」も刊行された。醉興山人の序がある。年々六月十六日に改板するといつてゐる。しかし、果して實現されたか、いなを詳にしない。この細見編者と「後の月見」の作者とは同一人であらう。

「後の月見」の原板のをはりに、二編近刻、角力一攢摺近刻と見え、また、口上として、

新かた年中行事ひとり案内と申スおもしろきしんはん出はん仕候間何卒ひとへに御もとめ御らん可被下候様奉希候、またくげい者子供衆のこらず角力にとり組御いちらんにいれ候、

と見えてゐる。刊行されなかつたやうである。

河東 方言 箱 ま く ら

大極堂有長の作、文政五年の刊行。

無着舎主人の題言、作者序の、兎鹿齋の題詩、及び作者の跋がある。さし繪二丁半、春川五七の畫である。

奥附に、文政五年午六月東
都山崎屋平八、浪花河内屋茂
兵衛、皇都近江屋治助、山城
屋佐兵衛と見えてゐる。

作者大極堂有長の名は他に聞えることがない。しかし、傾城情史によつて、粹川子の別號であることが明である。この書は、文學をもちつた一篇の戯文である。關亭京鶴の作、天保三年、京都の出版である。その一節にいふ、

扱この書については箱枕

大客

酒氣章句

酒ハ氏氣ハ名アリ世ハ大酒先醒ト云此一卷の章句と
かちたまふ也酒氣章句と早口色飲とよむべし

酒サケ酏イ子コ曰イハク太客タイカク古コ之ノ妓書キカク而シテ祓客ハツカク入イリ通ツウ之ノ
門カド也ナリ當ツキ時トキ可キ見ミ通人ツウジン爲ス客次カクジ第ダイ者ノ獨ドク賴ライ此コノ
篇ヘン之ノ存ゾシ而シテ枕底シロソコ次ジ之ノ客カク者ノ必カナラ由ユ是コノ而シテ遊ユ焉ナリ
則スレバ庶ナラ乎カ其ノ不オホ溺ノシ矣ナリ
通人ハ大客ノ書トシテ古ハ其ノ
妓女ノことハ云フ

通人つうじんの願ねがひは、わびわびに次弟じだいを當時たうじあるべき月のつきの書しよの存ぞん

大客

妓お隠かくて身みを崩くずさるゝうんふちとり酒さけ酌しやく子こが
先まづ塵ちんよりは縦たて拂はらハハ半はん川かわ子この恨うらみを辰た巳し端は言いハハ三さん崎さき子このく也なり
夫客之道在通廓中在察妓情在止於酒宴

辰巳婦言の二書を見るべし、廓にあそぶものかならずこの書のをしへにしたがひあそびたまはゞ、妓に深くはまり、身を崩すことなきにちかしとなり、酒酩子は酩酊先醒なり、箱枕は粹川子つ作なり、辰巳婦言は三馬子のさく也

この粹川子は、昨川とも、翠川とも書いた。「徒然粹ケ川」の著者として聞えてゐる西村定雅である。通稱みすや甚三郎、縫針商として有名な家柄であつたが、遊蕩ゆゑに産を倒し、後には俳諧師匠、戯作者として立つたのである。俳諧は樗良の門下であつたが、晩年の句には、遊里を烟村としたものが多かつた。彼の洒落本と興を同じうする「徒然粹ケ川」の作は天明三年、また彼の若い頃であつた意外の好評が、昨川の號を附けさせ、また續編「眞々の川」を書かせ、なほ「當世嘘の川」などを書かせ、つひにこの「箱枕」を書かせたのである。

「箱まくら」三卷は、一貫した趣向の書でない。毎卷二章、すなはち獨立した六章から成つてゐる。章には着色いろつけ、魚寐うしね、有意おたりのある、雑魚寐ざつうしね、許情せうじやう、雜魚寐ざつうしね、相識さうしき、同心どうしんの題が附けられてゐる。

河東の角書で明なやうに、この書は鴨川の東、祇園の地を世界とする。また、「箱まくら」の題で明なやうに、藝子を主人公とする。箱は三味線の箱を意味する。藝子が藝を賣らないで、色を賣る始末を、主題とする。されば、自序にも、

もろこしの孫楚は流れにまくらして石に漱ぎ、今どきの歌妓は箱を枕にして流に身を沈むといつてゐる。中巻巻頭の鬼鹿齋の狂體の題詩またこの事を斷つてゐる。

當世藝妓不主皮、此箱作枕稀張絲、健啖少語偶閉口、催促日柄在何時、

「箱まくら」の作者は、六つの題の下に、かういふ藝子と客のいきさつを分けて書いた。客と藝子とその背景との相異による種々相を描き出した。作者は、魂膽手管をうつして、なほ足らざるをおそれた。「野暮輔曰」として、各章に評言を附した。客と藝子の態度の優劣を評する體をとりながら、作意を明に示した。假託の人野暮輔の評は實は、本文の釋であつた。

「箱まくら」の形式は、常の洒落しやれつ平型である。その會話の中には、もとより當時の通言を用ゐてゐる。作者は、本文中にそれを用ゐた時には、傍線を附し、章のをはりに於いて、細かい註釋を加へてゐる。これが角書して、「河東方言」といふ所以であつた。

京都の洒落本は、つひに振はなかつた。たゞこの書の如きものがあつて、稍氣を吐くに足りた。

色ふかみ深こ猿さる睡ひ夢

葦廬屋高振の作、文政九年の刊行。

奥附に、浪速葦廬屋高振著述、江戸柳園種春校訂、江戸歌川貞晴畫圖、同和田正兵衛執筆、文政九内戌年三月吉辰發兌と見える。また江戸大坂屋、名古屋玉野屋、京山城屋、大坂河内屋の書肆連名が見える。

作者高振の自序、梅園主人の序、また種春の序がある。口繪及びさし繪十三圖、九丁半、本文四十三丁、上中下の三卷、これを六回に分つてゐる。五冊の半紙本。

この書、四回、上中二卷は、高振の作、下卷は種春の作である。上中は種春校訂、また校合となつてゐるが、その意は校閲、増補を意味するやうである。種春の加筆の部分が少くないかと思はれる。

作者高振に就いては、殆ど知るところがない。種春に就いては、わづかに、「京攝作者考」によつて、攝津武庫郡今津の人、小澤氏といふことを知るだけである。また梅園の序には、彼を江戸勤學といひ、奥附には江戸柳園種春といへば、江戸に出て、戯作の道を修めたのであらうか。或は、その戯名からおして、種彦の弟子になつたか、それとも種彦の崇拜者であつたかと考へられる。いづれにしても、種春、高振ともにさまでの作者でないことは、この作の上から察することが出来る。なほ畫工歌川貞晴のやうな若年者であつたかとも思はれる。

この書の舞臺は、大坂島の内である、かねて坂町にも亘つてゐる。その舞臺の上で、描き出さうとするのは、遊女の手管魂膽である。題號すてに、それを示してゐる。種春は、序においていふ、「題して深色猿睡夢」といふは、かの青樓の醉娼は、意金に在て、客を戀るあらざるゆえなり」と書かれてあることからである。廻し男を間夫とする若い遊女が、巧に二人の客をあひしらふ。一人は田舎客である、許嫁のあることも忘れて、國へも歸らうとしない。彼女のまゝに金を貢がうとする。遊女は、その田舎客との仲をわざと見せつけるやうにして、も一人の土地客に嫉妬を起させる。意地づくから、これも金を運ばうとする。田舎客の附人と、逗留宿の亭主とは、早く遊女の奸計を看破して、その實情を田舎客に見せる。彼は悔悟して歸國する。

この趣向は、もう洒落本ではなかつた。梅園主人が、序に於いて、小冊といふのも當然である。筋の運び然り、教訓めかす態度然り、もう立派な讀本である。しかし、これを讀本の部に入れることの出来ないのは、會話體の洒落本型であるからである。作者は一面狂言本らしく見せようともして、よろしく幕とか、舞臺廻るなどといふほどである。といつても、人情本でもないのは、作者は努めて通がらうとしてゐるからである。

描寫の拙さは、ともすると、筋のみが重くならうとする。作者は、評に曰はくとして、一々描寫のあとに説明を加へる。説明は讀本風の教訓を明にすると共に、更に多くの注意を通の解説に當てゝゐる。こゝに、この書が、なほ洒落本といはねばならなかつた。

大坂は、いはゞ洒落本の發祥地である。しかし、後には、空しく江戸のために名を成さしめた。理由は、輕妙な通の描寫を得なかつたためである。この書の如きは、大坂の洒落本の特徴を最も多く有するものであらう。時代のおくれてゐる事と共に、合はせ考ふべきであらう。

金こがねの郷さき 春 夕 榮

猿赤居士の作、嘉永三年の刊行。

猿赤の題詩、自序、狂迂の序、笑叟の題辭、安原の夏澄の跋、口繪二圖、鶯物の書、本文十五丁半の一冊物。中本形である。

猿赤居士は讃岐の人、その號は、いづれ俚諺、國の猿から得たのであらう。金毘羅の住であることは、安原の夏澄の跋に、「象山の麓に猿あなりぬ」とあるので明である。その傳を詳にしない。

世界は金毘羅である。客と藝妓の關係を主題とする。金郷こがねのさとの題號の本づくところである。

若い通客と美しい藝妓が風呂屋で知りあひになる。それが縁のはしで深く契り合ふ。間もなく通客は勘當となる。藝者はいろいろと工夫して、貢いでゐるところへ、大盡客が出現して、身請しようとする。妓は惱み深くして病氣にさへなる。しかし、これは皆、通客が妓の眞情を試すための手段であつた。

金糸春乃夕榮

狹貫

猿赤居士戲編

第一回

島原芳原もあゝ象山よ人を動も花もさく人予友狂迂
痴叟よりこのまゝ花も解語四季の春むれも客を松尾街
五百の長市と名付いざんとむのくれりそ今い屋敷も
ア、三千て奥麟ふつく薨そそふ小浪花ともいふべれ
朝中より焼く混堂へ入る少年芋淨招理い

筋からいへば、いかにも人情本めいてゐるが、會話少なな走り書風のものである。わけて、短さが委曲を盡さうとする作風と異なつてゐる。作者の要求は、この筋を運ぶ舞臺の名を見せるにあつたらう。その地方色を描寫するとよりは、金毘羅の地名を出したかつたのであらう。つひに、この作には地方色を見ることが出来なかつた。

金毘羅の地、本來は松尾である。

書中にも、口繪にも見ゆる鞘橋の西詰から小坂までのうちが殊に殷賑を極めた。金毘羅十二景の内五百長市といふのがこれである。書中また「むれ来る客を松尾街、五百の長市と名付しは、ずんどむかし」の事にて、今は屋敷もア、三千て魚鱗につどく薨こそげに小浪花ともいふべけれ」といつてゐる。地はすでに築えてゐる。青樓も盛に、妓も美しからぬ筈はない、かうも土地の通士は思ふのであつた。巻頭のよしこの、島原芳



「繪圖所名諸參羅毘金」

島原芳

原^ひもない象^{やま}山^{ざと}に人^{きどは}を動^もす花もさくは、さういふ通士の作であらう。その誇りがまた、この様な洒落本を作らせたのであらう。

作者は、江戸の洒落本を摸倣しようと努めた。自序に「藝なし猿のまけぬ氣で、彼大江戸の諸名家にましらと思ふあき智恵は、手におよばざる水の月」といひ、狂迂の序に、「お關所こさずエ江戸ことばはナンダバカラシとおとがめなく、ア、是ものどかなるみ代の春にうかれ幽谷を出て喬木にはいまだうつらぬ藪鶯、かたことまじりの一曲も同じこゝろの友をもとむる心ざしは、ひなも都もかはらじと云々」といつてゐる。書中の會話は實に土地詞をも用ゐてゐなかつた。摸倣のあとの、殊に著しいのは、挿話として、ある小樓の貧客等の遊びをうつした一段が、三馬の「辰巳婦言」中のものから出てゐる類である。

この書は、もとより拙劣な作である。これを選んだ理由は、たゞ三都以外の洒落本であるといふ一點にある。地方色の出てゐないことは憾みであるが、それだけ江戸の摸倣の色の濃いのが、相應考察の資料となり得よう。

以上三十七部、これを校訂するに當つて、努めて原本のまゝにした。假名づかひを正さず、誤字を訂さなかつた。たゞ、あまりに假名のみつゞいて讀みづらいところだけに、漢字を當て、またやゝ多く句點を加へた。句點は、原本によつて句讀を分つたのもあつたが、すべて一定した。

解 説

その二

十文字含自恐、菊屋藏伎、並木新作の合著である享和二年板の「戯作評判花折紙」は、役者評判記の體裁に倣つて、洒落本百七十一部を月旦した書であるが、頭取之部に於いて、「異素六帖」「兩巴扨言」「華里通商考」「當世善導記」「百花評林」の類を加へてゐることは、「遊子方言」を評して「小書衣裳こみぎをつけの開山」といつてゐることと照應して、洒落本といふものを考察する上に、少なからぬ便宜を與へてゐる。

かつて、「遊子方言」は洒落本の祖といはれた。遊里に關する題材を、會話體の文章で書き、また人物の風俗についても詳細に説明するなどといふ條件を具備する典型的の洒落本、すなはち「花折紙」の評言のやうな意味では、この見解は今もなほ正しい。しかし、その條件に拘はらず、單に態度を同じうするといふ事ではない、その以前にもかなり多くの洒落本が存在してゐた。「花折紙」はすでに「異素六帖」を挙げ、「百花評林」を挙げ、「兩巴扨言」をさへ舉げてゐる。更にまた、「遊子方言」の小書衣裳附の開山といふ評は、もとより當つてゐるが、これも少しく條件を緩和すれば、この江戸板の洒落本以前に、早くも上方に於いて、この種のものゝ刊行されてゐた。「花折紙」は、それ等の中から、「聖遊廓」を挙げ、評言には、その先覺ぶりを認めてゐる。要するに、この評判記は、江戸と上方とに亘つて、極めて公平な態度を持してゐた。

「花折紙」によつて、頭取の部に据ゑられたものは、その刊行當時に、殆ど洒落本と呼ばれてゐなかつた。

まだ、その頃は洒落本といふ名目がなかつた。これあるは安永時分からであらう。少くとも作者みづからが洒落本と稱したのは、金魚の「十八大通百手枕」の自序がはじめてある。書は安永七年の刊行に係る。あまりに遅いこの名目の出現は、實があつて名のない頃の作を、他の品類と區別することに於いて、かなりの困難を伴つてゐる。洒落本の名目の存在する以前には、通書といはれてゐたが、その通の意義が漠然としてゐるだけに、通書の分野も甚だ明瞭でない。さきに、「遊子方言」を洒落本の祖にさせたのは、「遊子方言田舎老人著 何れもさま御そんじ通書のはじまり也」といふ安永二年の再板「辰巳之園」巻尾の廣告文を證左としたのであるが、それは餘りに、狹義の解釋であつた。本來ならば、江戸の小説の分類は、もつと科學的の扱ひを要求する。しかし、しばらくその慣用を重んじて、洒落本の名目をおくとすれば、むしろ、範圍を廣きに失するにしても、狹きに陷ることを避ける方が便宜であらう。洒落本の起原をずつと古きに据ゑて、「兩巴扨言」あたりとする方が、安

戲作評判花折紙

○惣巻頭

△人々名お紙はよきものなり

極上吉

傾城虎巻 金葉作

おけのちいさなうの極上

○立役之部

極上吉

早公手總腹 紙作

おけのちいさなうの極上

上吉

三教 色 三和作

おけのちいさなうの極上

上吉

二醉入 金葉作

おけのちいさなうの極上

上吉

惠比良梅 紙作

おけのちいさなうの極上

〔紙折花判評作戯〕

全であらう。少くとも、享和の頃は、それ等を洒落本と考へてゐたのである。「花折紙」に擧げる諸作は、その頃に於いて認識せられた洒落本と見るべきであらう。しかも、洒落本の特質からいつても、それは最も合理的な見解であらう。

二

通は通曉の意である。世を知り、人を知つて、流通無礙に、おのれを處する所以であらう。それが遊里の事情に通曉し、遊里の作法に適應するものと解せられるのは、つひに第二義のものであらう。通は世の動きをまさしく正しく觀察し、その動きに順應する。髪の流れ、着物の流行、羽織の丈の長さ短さ、羽織の紐の太さ細さに、どれほどの意味があらうが、なからうが、とにかくに流行なれば、その流行におくれず、人に笑はれないやうにするのが、通であつた。いや、それよりも、通の通たる者は、流行にききだちて、これを指導するほどの先驅者でなければならぬ。通とは畢竟自己優越感のあらはれである。通の高きにあつて、不通の境を瞰下し、通の廣きに亘つて、世間の穴を穿つ、こゝにいふところの通書が成立する。通書とは通人が範を垂れるための通の教科書のみでなくして、不通の醜陋を示して、さて通に導かうとする方便書でもある。少くとも「遊子方言」は、かういふ趣向のもとに書かれてゐた。すなはち、通書は一面滑稽本の要素を包含することを必要とする。これはまた通本來の性質にもよることであつた。

何といふ矛盾であらう、通人が、一代の儀軌とする通が滑稽を随伴するとは。もし、通人が眞意の達人であるならば、もとより、この矛盾はない。江戸の時代相は、通人をして、あまりに、小く、あまりに、狭く

活躍させる。彼等が造次も顛沛も違ふことなからんとする通は、つひに實人生と何等の交渉もない些事に過ぎない。缺陷多き江戸の社會制度、沈滞せる社會生活は、有閑階級をして、あそびに専念させる。あそびが通である。世人はあそぶ人々を見て笑ひもする、通人は、みづからあそびに耽つて笑ひもする。これ實に江戸時代に於いてはじめて見られる變態的現象であつた。

洒落本の洒落は、はじめからこれ等多様の意義を籠めた名辭であつた。洒落は一にされとも解された。され頭、され板のされの義である。「好色由來摘」に、ふれま鶴間小女郎の解がある。解して小野小町の記事であるといふ、さていふ、

是を以て按ずるに、當世體たるといへるは、萬事に達したるものをいへり。是小町死てのち、猶頭の體たる迄も、歌の道を忘れざるといふ深切の所を、萬の道に達したる者に合て、しやれたると褒美したる詞なるべし。此ゆへにしやれまの小女郎といへるとかや。

京傳の黄表紙「世上洒落見繪圖」は、世の通人が通を念ずるのあまり、つひにしやれて石のやうになるといふ滑稽を描いてゐる。趣向の基づくところは、洒落に曝の義を托するにある。これ等共に諧謔の筆ではあるが、洒落と曝とに通ずる意義を拘むものには、さし支へはない。久しきに亘つて、世の雨風に曝さるるものは、つひに、世故に通曉するものでなければならぬ。洒落本の洒落は、かゝる過程の下に、通の意義を有つてゐる。

通が優越性の一表現であることは前に述べた。その感を以て世俗に對する時に、まづ穴を穿つといふ態度になるのが常である。平賀源内の如きは、他の條件も附け添うたために、やゝ異なる態度にもなつたが、本

る遊里を描寫した書が、よし滑稽本といはずとも、滑稽の字を當てられる理由は何であらうか。なほ通人の生活や滑稽とする實世間の功利人の眼を以て見るからである。洒落、作者亦一面そこを覗つて書きもしたからである。自嘲とはいはないが、みづからを省みて、快く笑ふのが、江戸時代戯作者の通有性でもあつた。

三

洒落本作者が、しやれぼんに、艶史また情史の字を當てたことも亦注意すべき事に屬する。「部屋三味線」の附見大意にいふ、

近來清人の著す所の艶史多く渡り妓月娼門中國に蕃衍し蠻貊に及を知る、

地理志

五 通唐書

聖門之徒有司馬牛者乘浮海東海之東
有東武國其北隅有吉原國是持君子國
也時持權君子國司馬牛相其攸計其居
孫く世い成一都邑義不食陳夷之粟賣
藏而為業之其國職與女陰多クイ今稱
之通稱龍體故其國到今稱

〔花 殘 林 史〕

「遊僊窟烟の花」の跋にいふ、

周茂叔（こはく）小冊を作ともよも斯情史に過じ

洒落本を支那の艶史ま

た情史に擬することは、
必ずしもをかしくない。

書の性質ほど同じく、作
者の態度また似てゐると
ころがあるからである。

寛政度に於けるこの二冊
の洒落本が、かういふの
は、やゝ街へるに近いが、
洒落本の成立の當初に於
いては、支那の艶史、ま
た情史の影響は少くなか
つた。

「花折紙」が擧げてゐる

「調雨巴厄言」は享和十三年の板であるが、吉原の細見に、漢文の序を附してゐる。漢文莊重の體で遊里の記

史林殘花

遊戔史

賣妓之長曰嚮蓋取義於司馬之姓也稱
賣妓之奴曰牛是亦取義於司馬氏之名
也其妓有大夫格子山茶梅茶司之品其
價有二十七二十一五五三錢之差山
茶梅茶者野也大夫格子者文質彬也
或為悅己者切髮入黑子異國新髮文身

「花 殘 林 史」

解 說

事を書くといふことが、すでに矛盾であるところに、なほ細見と伴ふのである、一見滑稽をの感を起さざるを得ない。作者が艶史の類を繙いて、そのあとを追はうとする意は、おのづから考へられる。讀者また漢文に熟して、すでに經典の堅いのに飽きが來てゐるもの、殊には、享樂の時風に乘ずるのである。大に悦んでこれを迎へざるを得なかつた。後二年、「詞史林殘花」が出で、後三年、「詞兩都妓品」が出たのである。吉原と島原の細見に、「史林殘花」の漢文を合せ刻したのである。ついで、延享四年には、本集に收めた「百花評林」の刊行を見た。まづ洒落本の起原争ひをしさうなこれ等の書は、江戸と京都に於いて、皆漢文者流の手に成つ

開卷一笑卷之二

明

日本

懼内經

李卓吾先生編
張鹿鳴野人譯

鴛湖散人

佛說怕老婆經、老婆不是凡人、他是什麼人、
 他是天上、一座星、他是什麼星、他是一箇黑殺
 星、白虎星、天狗星、天賊星、天羅星、地羅星、不犯
 之時、猶自可、犯了之時、嚇殺人、順則和顏悅色、

「笑 一 卷 開」

たのである。

江戸に漢學者澤田東江の作、「異素六帖」の出づるにききだつて、大坂には、獻笑閣戲笑の「月花餘情」が出て、無名子の「聖遊廓」が出た。これ等共に漢學者流の筆に成る。めざましいのは、寶曆頃の大坂の漢學者の戯作である。彼等は、幾多の怪談物を書いてゐる。いづれも支那の小説の翻案であつた。彼はまた支那の艶史の類を耽讀した。その結果は、張鹿鳴野人をして、支那の洒落本「開卷一笑」を抄し、それに傍訓と釋義を附して翻刻させたのである。彼等はまたこれ等の趣向を學んで、幾多の洒落本を書いたのである。「聖遊廓」のやうな支那人を遊客とする趣向を立てたのも當然である。

「聖遊廓」の趣向は、單に支那人を遊客としたのが珍しいのではなかつた。孔子、老子、釋迦の三聖を拉し



四 賢 城 傾

來つたのが、奇抜の案であつた。世の尊敬しておかざるものを翻弄することは、滑稽感を大にする所以である。大坂の漢學者は、二重三重の意味で、遊里の書を、滑稽本としたのであつた。同じ態度は、江戸の「異素六帖」にも見られた。佛者、儒者、歌學者を揶揄せんとしてゐた。洒落本の性質が、もともとそれであり、漢學者の洒落本運動に参加したもの、そこを焦點としたためである。

よしまた、漢學者でないにしろ、洒落本作者は、いつも經典を利用し、支那の神仙を材料として、しやれを發揮することを忘れなかつた。言葉の多きを厭つて、こゝに「傾城買四十八手」のさし繪を一つの例證とする。

四

慾界之
仙都之
昇平之
樂國



「手 八 十」

洒落本の洒落が通と滑稽の兩義を擁して、隨分、漢文仕立のものを棄てないとすると、その起原は「花折紙」の選みのやうに、「兩巴扨言」を以て擬すべきであらう。會話體のものの起原は、「花月餘情」を以て推すべきであらう。

ふところの衣裳つけ、即ち風俗を詳に説明するなどは、「遊子方言」にはじまるといふべきであらう。「遊子方言」は、いふまでもなく洒落本の典型であるが、典型なる理由の一つは、半可通のうぬぼれを發く趣向にある。通は優越性を以て、對者たる遊女を壓倒せんとする。半可通はたゞ通の假面を附けたに過ぎない。假面は剥がれた。壓倒せんとする勢はどこへやら、さきの優者はあはれむべき劣者と



【子照肝象客】

なつた。事の變化が讀む者をして哄笑させる。多田爺は、かくして洒落本の洒落の本義を、遊里寫實の態度のうちにも失はなかつた。

後の洒落本作者はこの典型によつて、洒落に含む滑稽の筋を維持したのである。

洒落本は、往々風俗に於いて、また遊びの作法に於いて、讀者を教育しようとするやうな遊びの精神に於いて、しかし教科書風の體裁をとる。それにさへ、何等かの形で滑稽を加味しようとする。あの「部屋三味線」の如きは、更に別風の教訓を寄せてゐる。

夫微瘡下疳使便毒結之病、近世尤盛而貴賤男女羅之者、十居其半、是和華一轍、蓋承平酣歌之都會、人々樂安佚、内則膏粱賦味、常充口腹、遂生濕熱瘀血、外則沈匿柳巷花街、以動蕩淫火、一釀成此病、遂傳之妓妓男娼、則娼



「鏡 總 自」

みづから、遊女また客衆の人物を描き、更にまた風俗、態度及びせりふまでを記して、微に入り細を穿つてゐる。

しかし、この書に於ける京傳のうがちはこゝに止めてゐるが、このうがちの趣向をうけいれて、それに魂膽手管の内容を盛つたのが、振鷲亭の天明九年の作「自惚鏡」であつた。これは、客衆を息子桂、率頭醫者、武左、俠客、色客に分ち、それに一人一人の遊女を配し、その遊女の風俗、態度を圖解してゐる。

京傳は、また、その趣向をうけて、魂膽手管の方から分類して、「傾城買四十八手」を作つた。このやうにして、洒落本は、ある範圍にとゞまるとはいふものゝ、ある程度の心理的解剖にまで入つたのである。洒落本の最も至れるものは、これであつた。

洒落本の通と、浮世草紙との間には、極めて大きい距離が存してゐる、時代の相異である。今はその説明を省くことにするが、洒落本の通は、「まこと」を問

題としないで、「あそび」を主眼とする。客と遊女の心理的解剖は、その「あそび」と「金」との微妙の關係を窺ふことであつた。互に手段と魂膽の裏をかかう、かかうとする勝負が作者の手腕の見せどころであつた。そこを、露はな趣向としたのが、關東米の「取組手鑑」であつた。關東米は振鷲亭である。こゝに、振鷲亭

三舍目
床入後

柏木 負惜

古野川 吉勝負来 傳

取組手鑑

に就いて、例を引くことの多いのは、彼また有数の作者で、少くとも、その一二部は、この本集中に収めた
い作の持主であつたからである。

趣向の一々をいふことを煩はしとして、たゞ巻頭の一二圖を掲げる。大體の仕くみを推察するに難くはないと思はれる。

しかし、洒落本の世界でも、「あそび」が「あそび」で終らぬ場合が多い。あそびの心を裏切る「まこと」の迷ひを奈何ともなし得ない。さういふ趣向立は、ずつと前から現はれてゐた。田螺金魚の「傾城買虎之巻」などがそれである。その作風をうけた、「傾城買二筋道」あたりから、「籬の花」などを経て、つひに人情本の世界へ移つて行つたのである。

五

延享から幕末にまでひき續いた洒落本推移のあとは、おのづから三期に分れてゐる。延享から明和まで、これを第一期とする。安永にはじまる第二期と、第三期を區別するものは、寛政二年に於ける洒落本禁止令である。すなはち、安永から禁止令發布までが第二期、その後が第三期に當る。



論しさ「取手組取」

尤も、禁止令は洒落本にのみ限つてはゐなかつた。一切の書の風紀に關するものが禁止せられたのである。寛政二年十月二十七日には、

書物之儀毎々より嚴敷申渡候處、いつとなく猥に相成候、何に不寄行事改候而繪本繪草紙類迄も、風俗の爲に不相成猥々間敷事等勿論無用に候云々

と地本問屋行事等に申し渡された。さういふ書物の中で、當然問題になるのが洒落本である。この申渡しの前には、洒落本はもとより影を潜むべきであつた。ところが、その翌三年の春、板元萬重は京傳の作「仕懸文庫」「絹籠」「錦の裏」を出版した。果然、板元作者は勿論、改方不行届の理由で行事までが處分を受けた。こゝに、洒落本は全く姿を隠した。古い作にまで絶板の命令が出された位であつた。

それも當然の處置であつたらう。一體洒落本の存在、いな洒落本に描かれる通の生活が、すでに江戸の社會の變態性を語つてゐるのに、安永後の洒落本は、當時の社會道德がゆるさぬほどの變態的興味を縱横にはじめた。遊女と客のあそびに對するうがちの細さもさることながら、閨中の描寫がかなりの度はづれとなつたのである。第一期に於いては、いふところの平賀ぶりの一面で、廣く世間の穴を考へてゐた、遊里の穴をうがつのもさうまで深くなく、閨中の祕をうつすのも、あつさりとしてゐた。それが、第二期となると、時代の廢頽氣分と共に、一段の濃度を加へたのである。さすがに、京傳の如きは、さういふところを覗はずとも、他に重要點を保持してゐたが、多くの洒落本作者は、ともすると、それに力を致さうとした。岡場所の存在をゆるさぬほどの當局の嚴令一下にも、たしかに道理はあつた。

しかし、三日法度の江戸時代である。取締の弛むにつれて、またぞろ、洒落本は芽をふき出した。通の生活

なしに生きてゐられない當時の社會人には、どうしても讀まずにゐられない洒落本であつた。たゞ前期との作風の相異はめつきりと目立つた。讀本の影響もつけたことであらうか、筋の變化と、「あそび」を裏切る「まこと」の發露が中心になつた。いはゞ、洒落本の特質である「しやれ」を失つて、人情本らしくなつて來たのである。

洒落本の歴史からいへば、寛政二年の命令は、極めて重大なる事件であるが、これけ外からの力であつた。ところが、同じほどの、或はより以上の重大性を有つ力が内から爆發したことがあつた。天明七年の「田舎芝居」の刊行である。もし、このものの力が、更に強かつたなら、洒落本の作風は一變したであらう。一變して、再び風來山人式に、穴の穿ちを遊里以外の世界にまで擴げもしたらう、また虚實を錯綜して戯作の妙こゝにありとしたのであらう。しか



地理記略

姉妹

一三三

し、京傳はじめ寫實を主張し、遊里の穴に専念する作者は多く、世もまたそれならては洒落本でないとした折とて、万象亭が師匠風來山人を表にかざしての努力も、わづかに、京傳との絶交を贏ち得たに過ぎなかつた。竹塚東子は万象亭の作意に倣つて、「田舎談義」を書いた、しかも、京傳はこれを世に紹介すべく、序跋を書いてゐる。何といふ矛盾であらう。或は知らず、京傳はかくして、万象亭の當時の洒落本に對する反抗を揶揄したのでなかつたか、それほど風來山人の餘威も今はものにならない爲實ばやりであつた。事は第三期に屬するが、あれほど風來山人張りの三馬も、その洒落本でも辛辣ぶりは見せながらも、寫實に没頭せねばならなかつた。「辰巳婦言」の如きも、後編また三編も、どこか人情本らしい趣向を立てゐるぐらゐであつた。



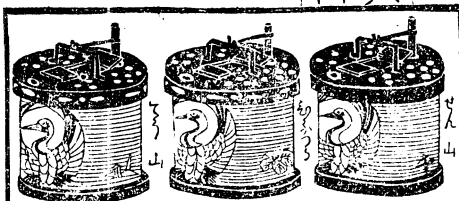
繪 し さ 「肥」

さすがに、万象亭の努力も空しくはなかつた。たゞ効果は洒落本の世界に現はれずに、滑稽本の世界に著しかつた。おそらく、彼は豫期せざるものを、滑稽本の道中物との聯絡に於いて見出したのであらう。彼の苦笑を考へざるを得ない。

まさかに、洒落本の洒落を失はない洒落本作者は、寫實に伴ふがち以外に、また様式の滑稽に考慮を拂ひもした、さうして出來た別格の洒落本は、おのづから第一期のものと性質を異にする。こゝに舉げる二例、「娼妃地理記」「濤都酒美選」の如きは、いかに繊細な趣向に於いて優つてゐるかを示してゐる。しかも、依然として、うがちと契合してゐる。

六

やどうて



○丁子郡

△せん山 せん山をくぐるとしやう
を直の客はまゝさうさくは南
の標のこぢれうでーは柳あさ乃
小四位のかねうんーよのまゝとて
よみとりづまうまうとくふん
いふやうなれは待てるまう
えー夜のまゝ何とがらん
法事おひの席たるはまゝゆめ
△おふ館 糸河のりくに
よりなむなうた雛の姿を立を

文 本 「選 美 酒 都 濤」

説 解

「兩巴扈言」はしばらく措く。洒落本の洒落本らしい發生の先聲は、上方、殊に大坂にあつた。しかし、發達は江戸に俟たなければならなかつた。ともすれば、洒落本とさへいへば、江戸を以て代表しようとする。また事實作の優秀なるものは、こゝにあつた。洒落本の性質として輕快を重しとする。輕快を誇る江戸の作者が洒落本の筆に適してゐるのは當然である。

しかし、通の生活のあるところ、都會享樂の機關のあるところ、遊里のあるところ、自らこれを描寫する寫實の書、洒落本がないことはない。大坂にも、京都にも、よし、優れたものはないにしても、その土地土地の洒落本があつた。それを通して、その文化を考へ、地氣を察する好箇の資料であつた。

江戸の遊里は、もとより吉原を覇とする。深川はやゝこれに抗するに足りる。しかも、一時岡場所の盛な時には、その重なるものには、おのおの、洒落本があつて、異相の描寫に力を致した。そこに却つて、吉原に得られぬ通もあれば、また不思議な變通もあつたらう。とにかくに、とりどりの面白さが、その通書として存在してゐた。

或は、これを吉原、新町、島原と比較したなら、岡場所めくかも知れないが、三百諸侯の城下町、さては港また合の宿に、遊里がある。従つて、土地の通人の筆になる洒落本がある筈である。そのあるものは出板された、あるものは纔に傳寫されて好事の者に讀まれた。これ等は、大方、三都いづれかの作者の影響の下にあつた。なほ、その遊里が、三都いづれかの遊里の儀軌を範とすると同様であらう。地方の洒落本と、三都の洒落本の交渉は、また江戸時代文學一般の考察の上に、少なからぬ問題を提供するかも知れない。地方文學と都會文學の關係を、俳諧などの上にも限つて、考察の焦點をおくべきでなからう。山手馬鹿人の

「道中粹語録」の如き、三馬遺稿の「潮來婦志」の如きは、その點に於いては、少しく價值を減ずる。むしろ、價值は本集に收めた「新潟後の月見」「金郷春夕榮」の如きものに求むべきであらう。本集わづかに、この二部の地方物を收めたに過ぎないのを憾みとし、またわづかながらに收め得たことを喜ぶものである。あまりに等閑視されてゐる地方洒落本であつた、おもふに、江戸の洒落本を讀む者は、作のよしあしは別として、大阪、京都のものを合せ讀むべく、更に地方のそれをも合せ讀むべきであらう。元祿の頃の浮世草紙作者が、ある作意を以て、一部の書に收めたそれそれの特相をば、今の讀者は、ある考慮の絲で繋いで、それ等を讀むべきであらう。片々たる小冊子であるだけに、かういふ綜合的讀法をも必要とするやうである。